

## 『功名咄』三(中巻ノ上)

本稿は東京大学史料編纂所蔵・押小路文庫が所蔵する、写本『功名咄』(三巻六冊)のうちの巻中ノ上を底本として翻刻するものである。

詳細な書誌は完結時に記すとして、該書は片仮名漢字混じり本、三巻(上・中・下)六冊、縦二十五・六糎、横十八・四糎。後補書題簽、左肩単辺。序文に「元禄八乙亥歳夷則(七月) 下旬／晡盡弄記探西翁之」の署名があるが、探西翁が誰であるかはまだ突きとめていない。今稿に収める中巻ノ上は墨付五十二丁(三〇話、ただし目録は二九話)。目録はすべて「○○咄」で統一されている。本書は上記押小路文庫蔵以外に、金沢大学附属図書館北条文庫と大洲市立図書館矢野玄道文庫が蔵する。二本とも片仮名漢字混じり本、大洲本は巻下ノ下を欠き、上巻表紙(書題簽)に「堀部彌兵衛著」とある。三本ともほぼ同内容であるが、細部に若干の異同があり、それらを比較するに、三本とも原本とは言えず、三本に遡る祖本があると想定される。他に京都大学附属図書館蔵の『武道撫萃録』二八三・二八四に、『功名咄』下ノ上・下二冊が収録され(平仮名漢字混じり)、また、明治四十一年十月刊『功名咄前編』(川口一雄校正・報行社刊)が『功名咄』上巻を絵入りで翻刻し(ただし底本の四八話に比し八話欠)、国立国会図書館と学習院大学附属図書館(二五〇頁落丁)が所蔵している。

今稿の初稿は井高美妃(本学大学院文学研究科修士課程修了)が作

『功名咄』三(中巻ノ上)

成し、それを江本が凡例を作成しつつ校閲した。従って最終的な文責は江本にある。当初、江本は、本書が別題の先行書の転写、ないしは抄出ではないかと疑ったが、管見の範囲、独自の武辺咄であるとの結論に達している。順次翻刻を行なって、読者の判断を待つものである。

江 本 裕 編

### 凡 例

- 一 底本は東京大学史料編纂所・押小路文庫所蔵の『功名咄』(三巻六冊)の「中ノ上」(三冊目)である。
- 一 翻刻にあたっては原本を忠実に翻字するように努めたが、通読の便を考慮して、概ね次の方針に従った。
- 1 本文各話に、一・二箇所段落を設けた(底本・他本等とも段落はない)。
- 2 底本には句読点はないが、私に句読点を施した。なお、闕字に關しては、二字空けに統一した。
- 3 本文の中で会話体となるべき所、また心中思惟・格言と見なされる場面には「」を付けた。
- 4 本文には割書(時には右傍)があるが、当該個所に「」を付けて区別した。

5 漢字について

イ 常用漢字にあるものは原則として現在通行の字体に改めた。

ロ 異字体・略語体は原則通常の字体に改め、宛名は正常な文字が想定できるものはそのまま用い、難読のものについては平仮名でルビをつけた。なお原文は、「衛」(数箇所)、「エ」と表記と「類」はすべて「イ」「美」の略体で表記しているが、すべて「衛」「類」で表記した。

ハ 「籠」と「籠」、「砲」と「炮」は使い分けた。

6 片仮名について

イ 底本は稀に濁点を付し殆どの場合濁点を付していないが、底本のままとした。

ロ 底本に使われている合字「𠂔・𠂔・𠂔・𠂔・ノ」に関しては、それぞれ「トキ・トモ・コト・シテ」と開いた。

7 底本の反復記号は「、・、・、・、」であるが、これを「、・、・、・、」とした。

8 振り仮名(ルビ)は、底本は片仮名で付す。翻字にあたっては、底本に付す漢字については片仮名で付し、左訓については当該語の下に「」をつけて示した。なお、難読と思われる漢字については、私に平仮名・現代仮名遣いで付した。

9 底本は「レ点・一・二点」を付す場合もあるが、当時の慣用として、付していない場合が多い。原則底本通りとしたが、特例的に私に訓点を施し、その場合は「」を付した。

10 底本で疑問に思われる表記もそのままに記し、本文の右傍に①②で示し、各話ごとその異同を末尾に、大洲市立図書館矢野玄道文庫本(略号(大))、金沢大学北条文庫(略号(金))で示した。付記 翻刻を許可された東京大学史料編纂所に、深甚の謝意を表する。

功名咄中ノ上目録(便宜、中巻上だけの目録を付す)

一 前田越前咄	一 田湖主水咄
一 拙叟咄	一 笹ヶ瀬左太夫咄
一 大崎玄蕃咄	一 大熊七藏咄
一 前田伊織咄	一 西脇甚五左衛門咄
一 坂本信濃咄	一 金松又四郎殿咄
一 竹内咄	一 酒匂咄
一 舟田長門守殿咄	一 坂東咄
一 渡部咄	一 井伊掃部頭殿咄
一 立花咄	一 加藤左馬助殿咄
一 太田咄	一 伴兄弟咄
一 上田咄	一 桶野酒匂咄
一 高松六彌咄	一 関主税咄
一 野村勘右衛門殿咄	一 野村殿草履取咄
一 金松咄	一 辻肥前咄
一 天野咄	

(本文では、「金松又四郎殿咄」と「竹内咄」が入れかわっており、目録に記載はないが、「高松六彌咄」と「関主税咄」の間に「蜷川山城守殿咄」と称すべき咄が加わっている。巻中ノ上に関して、金沢大学北条文庫本は、第二丁目の裏と二丁目表のみのが、巻下ノ上の一ウ・二オと入れ替っている。綴じ違いと考えられるのが、翻字に際しては、正常に戻して対校した。)

一 浅野紀伊守幸長、紀伊国入部仕給ヒテ以後、小野覚雲・根来小ミツチャ・辻肥前、上田宗吉、箕浦大内蔵・伴兄弟ナト云者、諸方ニテ場数有覚ノ者共七・八人被召出。或時、饗応有テ御前ニテ御

茶被下、其上ニテ宣ヒケルハ、「各儀日比聞及テ所望ニ在ル所ニ、各我家中工御座ケルコト欣然ノ至也。明日ガ日天下珍事有テモ、我等先手ニハ無心元存事アラジ」ト宣ヒケレハ、皆々時ノ面目有気色指頭テ忝存ル所ニ、幸長ノ児小姓達ノ者、前田越前ト云者、勝手ニ有シカ罷出云ヤウ「何モ各儀方々ニテ覺有ト被存テ被為油断候ハ、籙本ヨリ先ヲ可仕侍。御油断アラレ候ナ。他家トハ替侍ヘシ」ト云。皆々、兎角ノ儀ヲ不謂。幸長モトカクヲ不宣シテ何モ退出仕ス。其後、紀伊守殿彼越前ヲ被召ケルニ、近習ノ者共、「扱々笑止成儀哉。不被謂儀ヲ云テ、上々ノ仕合ニテ閉門。扱ハ追弘力切腹タルベシ」トカタツツ吞テ聞居タリ。越前御前ヘ罷出ケルニ、幸長被仰ケルハ、「先程ハ扱々善謂タリ。其方カ如申、他家ノ思ヲ成テ油断セハ、籙本ヨリ合戦ヲ始ナンコト勿論也。吾家ヲ被<sup>カレ</sup>見<sup>ミ</sup>惡<sup>カガ</sup>①ナト御意有テ、思ノ外喜悅仕給シ」ト云々。

去ハ、此幸長ハ若輩ノ時分ヨリ、世人重セレ<sup>②</sup>人也ト云ヘリ。武州忍ノ城、高麗陣、関ヶ原合戦ニ瑞龍寺ノツブラニ於テモ、其功ヲ達給ヒヌ。誠ニ、平生兵ヲ勇給フコト、将ノ法ニ叶者也。大形ノ将タチハ、越前ニハ閉門致セ、氣違ノ取沙汰ニ可成者歟。覺有儀ハ、君臣共ニ武ノ道理ニ叶テ、武ノ志シヲ励ス時節ニ非スンバ、難成儀也。去ハ、此越前カ働ノコト瑞龍寺ノツフラ乗取給フ時、紀伊守殿人数ヲ三ツニ備、一番浅野五衛門佐、二番浅野右近、三番籙本也。然ルニ、左衛門佐者瑞龍寺ノ追手口エカケ行時ニ、左衛門佐ト右近ガ備ノ間ヘ、中村式部少殿人数ヲ押来ヌ。其時、籙本ヨリ前田越前ヲ軍使トシテ右近備ニ来テ云ヤウ、「我人数ノ内ヘ中村式部少数人交テ見苦敷間、左衛門佐備ニ統テ押付候ヘ」トノ儀也。右近御返事ニ「無被構」ト申ケル。其時、右近カ備ノ中ニ浅野喜七ト云者アリ。是モ浅野ノ嫡孫ニテ在シ。越前此人ニ向テ御返事、「左ハ被申問敷カ、如何スヘキ喜七殿」ト云ケレハ、「畏候」ト申セト也。依之越前ハ籙本ニ帰ル。右近ハ我人数ヲ丸クナシ<sup>③</sup>ト下知シテ、丸クナシテ、瑞龍寺ノ出曲輪ノ間ニ一町計ノ田ノ

切有ケルヲ、一文字ニ押越出曲輪ヲ乗敗ル。此時、喜七モ討死ス。其外手負矢<sup>④</sup>命者多シ。越前ハ右ノ御返事申上帰来テ、塀際ニテ手負ケレトモ、其場ノ一番乗ヲ仕タリトカヤ。左衛門佐ハ、追手口ニテ数人敵ヲ討取シト也。其節、右近コトヲ世人賞美セシモ最也。去ハ、如何ニ口賢ニ云共、無<sup>⑤</sup>真実<sup>⑥</sup>モノ、云コトヲバ不用モノ也。彼老兵共モ、越前常々強兵成ヲ以テ兎角ノ儀ヲ不謂、退出セシ者ナラン。幸長モ、如此ノ兵成ニ依テ、常々秘藏セラレケルト見ヘタリ。誠ニ、君臣連続ノ武威ナルヘシ。如此ノ国ヲ敵ニ受テハ、怖敷コト也。味方ニ持テハ頼母敷モノ也。可恐、可親。

①のルビ「ミスカ」(金)。②シ(大・金)。③レ(金)。④失(金)。

一 浅野但馬守長晟、安芸備後両国拜領有テ後、廣嶋ニ在城也。又、龜井能登守殿ハ石州津和野ト云所ニ在城也。夫ヨリ江戸へ上リ下リニハ、廣嶋一里計リ脇二六<sup>①</sup>日市場ト云所アリ。其所ニ来テ日和侍レテ、撰州大坂迄渡海セラレケル故ニ、毎度但馬守殿ヨリ夥敷馳走也。其故ニ、廿日市場ノ人民迷惑スヘキト有テ、能登守殿以使者於廿日市三町四方ノ屋敷ヲ申請度由、但馬守殿へ被申入ケルニ、其返事ニ廿日市場ヲ其方へ可進トノ儀也。依之能登守殿、家老共ヲ召テ「此旨如何有ヘキ」ト被<sup>レ</sup>問<sup>②</sup>異見<sup>③</sup>。其中ニ田胡主水ト云者、ツク<sup>④</sup>ト思案シテ云ヤウ、「廿日市場ハ千石余ノ所也。是ヲ受給テハ、万一天下ニ事出来ナン時ハ永代ノ籙下也。屋敷計御受可然」トノ義也。何モ此義ニ同シテ屋敷所望ノ由被仰遣ヌ又、於廿日市場三町四方ノ屋敷ヲ構ヘ、其内ニ家室ヲ建給テ、于<sup>⑤</sup>今江戸上下ノ節ハ、石州津和野ヨリ二日路難所ヲヘテ、廿日市ニ於テ日和侍シテ、撰州大坂迄被<sup>レ</sup>為<sup>⑥</sup>渡海<sup>⑦</sup>ケルト也。又或時、能登守殿ヲ招待有テ、於<sup>⑧</sup>廣嶋城内<sup>⑨</sup>夥敷被<sup>レ</sup>為<sup>⑩</sup>馳走<sup>⑪</sup>ケルニ、廣嶋家老共ニ向テ能登守殿宣ヒケルハ、「扱々、結構成御馳走余身過分ニ存ル所也。併御馳走有テモ苦カラジ。明日天下ニ珍事有テモ、御先手ヲ可仕」由被<sup>レ</sup>申ケレハ、其時但馬守殿宣ヒケルハ「家老共能登守殿

二被<sup>カ</sup>誑<sup>ナ</sup>ナヨ。其事ニ於テハ明日天下ニ事有ラン時、但馬守カ能登守殿ノ後見ヲスルトナラハ、恐ク天下ヲ引受テモ被<sup>ア</sup>思<sup>マ</sup>嫚<sup>ナ</sup>間敷物ヲト宣ヒシト云々。

去ハ、能登守殿ヨリ屋敷所望有シニ、廿日市ヲ可進トノ返事仕給ヒケルコト、兵法ニ云「香飼ノ下ニ有懸魚、重恩ノ下ニ有死夫」ト云ヘル心根ニモ可相叶<sup>レ</sup>物欤。受<sup>レ</sup>恩不知<sup>レ</sup>恩、非<sup>レ</sup>人倫。去ハ、能登守殿心有<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>トモ、喜悅可<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>コト勿論也。又、能登守殿カ家老ノ分別、是又最至極セリ。恩ノ内ニ所領ヲ第一トス。然ルニ、千石余ノ所領ヲ常々受置時ハ、乱国ト成ナン時ハ、能被<sup>レ</sup>官也。但馬守殿ハ、四拾万石余ナレハ、廿日市ハ少シノ儀也。能登守殿ハ、四万石余ナレハ大分ノ儀也。去ハ、諸候ハ大船ノ如シ。依風湊ニ入依風湊ヲ出ヤウニスルト古ノ書伝ニモミヘタリ。左有ハ、主水カ云如ク、所領ヲ受ハ永代ノ被官也。又捨<sup>レ</sup>恩強キ方ニ附コトモ不<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>道。所詮所領ヲ不<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>受。又、恩捨ルコトハ非<sup>レ</sup>道ト云テ、弱ヲ不<sup>レ</sup>構シテ破<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>ハ家<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>又先祖ヘノ不<sup>レ</sup>孝也。兎角人ノ恩ニハ不<sup>レ</sup>成程能<sup>レ</sup>コトハアラン。又、能登守殿廣嶋ニテ被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>馳走<sup>レ</sup>ケルニ依テ、喜悅ノ余ニ戲ニ事寄テ我志ヲ述給フ者欤。然ルニ、但馬守殿、其詞ヲ押エテ「我後見セハ、天下ヲ敵ニ受テモ思嫚者アラシ」ト宣フコト不<sup>レ</sup>負<sup>レ</sup>云分也。去ハ、能登守殿モ真実ニ満足ノ色ヲ顯シ、兎角ノ義ヲバ不<sup>レ</sup>宣、忝ト計宣ヒナバ、最善カリナン。物ヲ不<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>シテ国ニ教ヲ成者ハ篤行也ト、古ノ聖モ被<sup>レ</sup>仰置侍リ。去ハ、武ノ交リニモ、諂一言臆仕タル一言ヲ聞テハ、其胸中迄被<sup>レ</sup>押量テ浅猿敷思侍ル。覺謂ハトテ、物每人ニキセカケヌル如ク高慢ナル咄モ不<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>同類。其程ヲ能々思量仕給へ。

①廿(大・金)。②「是」の左下の「レ点」、他本にはなし。

一 元和・寛永ノ比、稻葉能登守殿ハ、豊後ノ府内ト云所ニ居城也。其家中ニ、百五拾石取侍、村上太郎右衛門ト云、小章履取ノ拾ニ、三才成ヲ召置ケルニ、此草履取、伊呂波ヲ一ツ求テ腰ニ入テ廻リ、

供ノ先ニテ混<sup>レ</sup>ト砂ヤ土ニ書習ケルヲ檀那是ヲ見付テ「吾ハ奇特也者哉」ト云テ硯墨紙等ヲ取セ、手習ヲ致サセ不便カリシニ、弥利発才幹成者也ケレバ、其侍一向宗ニテ後生願ケルニ依テ、檀那寺ヲ頼、一向宗ノ弟子ト成出家ノ姿ト成ヌ。又、其比能登守殿、能ヲ遊<sup>レ</sup>遊<sup>レ</sup>桃<sup>レ</sup>ト仕給ヒケルニ、諸人見物ニ罷出ヌ。能登守殿ハ、禪宗ニテ殊之外御崇敬也。其故ニ、諸宗ニ勝テ禪宗ヲ上座ニ置、諸宗ヲ不<sup>レ</sup>交給。然ル所ニ、右ノ一向宗ノ小僧、能未<sup>レ</sup>初以前ニ出テ、禪宗ノ座ニ着テ在リ。其故、能登守殿家老稻葉図書ト云者、小僧ニ向テ、「其方ガ居所ハ彼辺也。退候へ」ト云ヘトモ不<sup>レ</sup>退。依<sup>レ</sup>之、図書荒カニ謂テ、扇ヲ以テ下座ヘ押退ケルニ、小僧赤面シテ、我扇ヲ以テ図書カ面ヲ打。図書被<sup>レ</sup>打云ヤウ、「其方物之道理ヲ不<sup>レ</sup>弃、此所ニ居度ハ禪宗ニ可成也。爰ニハ禪僧ノ外不<sup>レ</sup>置所也」ト被<sup>レ</sup>謂ケレハ、小僧暫思案シテケルカ、「御最ニ侍ル。私ノ違也。御赦免被<sup>レ</sup>遊候へ。向後禪宗<sup>①</sup>罷成侍ル」ト云テ珠数ヲ切テ投出ス。〔此禪宗ノ師、薩摩ノ古文ト云リ〕其時図書謂ヤウ、「扱々、其方ハ才幹成者哉。学文ヲ仕度思フナラハ、金銀ヲハ可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>執」ト云テ、夫ヨリ不便カリシ。其後、京都ヘ学文ニ登ケルニ、図書金銀ヲハ続ケルト也。彼僧無程学文仕テ名僧ト成テ、能登守殿菩提所ノ住寺ト成。豊後ノ拙搜ト云シハ此僧也ト云ヘリ。其時分、能登守殿招ニ依テ登城有シ時ハ、每度右ノ百五拾石取ノ宅ヘ先行テ、彼侍同道セサレハ、登城不<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>ト云リ。此意ハ全ク吾為<sup>レ</sup>ニハアラス。彼侍<sup>②</sup>ヲ能登守殿相親給フヤウニトノ儀也。図書モ結構ナル挨拶ニテ、崇敬有シ。家中侍共参会シテ法ヲ聞ケルニモ「余過テハ悪シ。侍ハ忠義第一也」ト宣ヒレ<sup>③</sup>ト云々。

去ハ、梅檀ハ二葉ヨリ薺<sup>④</sup>ク千里ノ行モ一歩ヨリ初ルト云コト実成哉。彼僧下劣ニ生ルト云トモ、志大ナレハ、蟄龍ノ時ヲ得テ天上スルカ如シ。去ハ、人モ志大キニシテ、其身ニ德サヘ備テ有ハ、天ノ時ヲ待計也。去ハ、彼龍モ時至テ天上スルト云ヘトモ、不足ナルコト有ハ不<sup>レ</sup>得、登シテ落ト也。人モ其德ナクシテハ高官大職

二昂ト云ヘトモ、其官職ヲ不得保不<sub>レ</sub>久シテ去ル故ニ、人ハ其徳ヲ積テ天ノ時ヲ可待者也。其徳我ニ不足ナル時ハ辞退スヘキコト勿論也。拙搜ハ徳有テ天ニ叶者歟。図書カ云分ヲ聞テ、早速珠数ヲ切レ<sup>⑤</sup>コト才幹ナル驗也。又、図書類ヲ被<sub>レ</sub>打ナガラ不<sub>レ</sub>恕シテ其道理ヲ云シコト、老シヤカヒ<sup>⑥</sup>覚侍ル。図書彼小僧ト扇子ヲ以テ打会ナトセハ、結句ニ見苦シカルヘキ。無左コト、殊勝ト云ヘシ。去バ、女童・出家・医者・盲目等ニハ、可有<sub>レ</sub>遠慮<sub>一</sub>者也。其故ハ、被<sub>レ</sub>吐<sub>一</sub>雜言<sub>一</sub>テモ難<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>相手<sub>一</sub>。若相手ニセシコトハ老氣ナシ。彼図書コト、此咄ヲ聞テモ平常ノ行跡善カラシコトハ、被<sub>レ</sub>推量<sub>一</sub>侍ル。又、拙搜登城ノ砌、古ノ檀那ノ旧恩ヲ不<sub>レ</sub>忘コト、最殊勝ナル僧也。又、家中ノ侍トモ法ヲ聞ケルニ、忠義第一ト教ケルコト最也。武ノ家ニ生レテハ、武業ヲ勤、其余ニハ後世ニモ願ヘ、謡・乱舞・歌学ヲモ少シハ心懸テモ不<sub>レ</sub>苦。過レハ非武、非士。欲<sub>レ</sub>知<sub>一</sub>武本意<sub>一</sub>文ヲ学テ覚ヘ給ヘ。学テモ不<sub>レ</sub>覚、不<sub>レ</sub>知其道本意、覚モ不<sub>レ</sub>勤ハ不<sub>レ</sub>覚ニ同シ。此故ニ、三略ニ最初、「夫主將ノ法ハ、勤テ執英雄之心」ト云リ。去ハ、英雄ノ心ヲ執テモ、不<sub>レ</sub>勤不<sub>レ</sub>可有<sub>一</sub>其益<sub>一</sub>。是以最初ニ去ル可<sub>レ</sub>成。此意ヲ吾ト得悟仕給ヘ。

①「宗」の下に「ニ」(大・金)。②侍(大・金)。③シ(大・金)。④「郷」のルビ「カンバシ」(大)。⑤シ(大・金)。⑥ニ(大・金)。

一 大坂夏陣ノ時、上総介忠輝<sup>幸</sup>先備ハ花井主水ト云テ若キ者也。手勢百五拾騎計。五月六日、其所ハ不<sub>レ</sub>覚、大坂勢ハ木村長門守、其勢二百五拾騎。森林家村ヲ形取テ備タリ。間ニ・三町深田ニテ噓道一筋計也。主水人数ハ、噓道ノ此方ノ広ミニ道ヲ一文字ニ立切テ備タリ。覚有所<sub>二</sub>籓本ヨリ、小森伊豆ト云者来ケルニ、主水云様、「何ト伊豆殿、自然備ノ立ヤウ悪敷侍ハ無<sub>一</sub>遠慮<sub>一</sub>御直給り候へ」ト云ハ、「何モ能侍ル」ト云テ、備ヲ乘廻シ「何モ見コトナル武者振ニテ侍ル」ト褒ケルニ、主水云ヤウ、「去ハ我等常々随分撰候テ持タル者共也。御覽候へ」ト被<sub>レ</sub>云ケレハ、伊豆、「如何ニモ御用ニ

『功名咄』三(中巻ノ上)

可<sub>二</sub>立給<sub>一</sub>。鐘ヲハ傍ニ引付持セ置、手足ノ不<sub>二</sub>草臥<sub>一</sub>ヤウニ仕給ヘ。合戦ハ末程有ヘシ」ト云テ、主水ヲ人遠所<sub>二</sub>招退<sub>一</sub>云ヤウ、「備ノ立ヤウ悪シ。其故ハ、敵噓道ヲカケ来ル勢ハ強キモノ也。左有トキハ、味方ノ備ノ中ヲ被<sub>レ</sub>割テ下知ニ難<sub>一</sub>附者也。同ハ噓道ヲ脇<sub>一</sub>見成テ筋違ニ被<sub>レ</sub>立ナハ善カリナン」ト云シ。故ニ、主水備ヲ立直シタリト也。伊豆ハ籓本ニ帰ヌ。(伝云、権現様ヨリ如此ノ老兵ヲ一人ツ<sub>一</sub>御子様達<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>附タルチ<sup>①</sup>ノ也。然レトモ此合戦ノ様子悪キニ依テ以後不<sub>レ</sub>入御意ト云ヘリ)其後、又玉虫対馬ト云老功ノ者来ラケルニ、主水合戦ヲ可<sub>レ</sub>始ヤ否ノ異見ヲ問。(此玉虫対馬ト問答セシ者ハ、越前山城守殿、其比御勘気ニテ上総介殿ニ属シテ出陣セラレケルカ、此問答故ニ御前<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>召出<sub>一</sub>ケルトモ云ヘリ)「最早未<sub>レ</sub>下刻ニ成ヌ。兎角セハ、黄昏ニ及ベシ。危キ軍センヨリ、明日ノコトニ仕給へ」ト云時、主水ノ備ノ足軽大将ニ、笹ヶ瀬左太夫ト云者云ケルハ、「カノ敵ハ夜ニ入侍ラハ大坂ヘ引取ヘシ。左有ハ、後悔タルヘシ。トカク敵ノ様子ヲミナガラ、我等ノ足軽ヲ懸ヘシト。其段籓本ヘモ被<sub>レ</sub>仰通<sub>一</sub>潮相能ハ懸給へ」ト云。対馬カ云ヤウ、「貴殿ノ足軽計ニテ何トシテ彼敵ヲ喰留給フヘキ」ト云ハ、「対馬殿被<sub>レ</sub>仰コトナレトモ、六尺ノ男ノ足裏ニ、飯粒カ付テモ自由ニ不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊行<sub>一</sub>者也」ト云ケレトモ、「トカク危キ軍ナ仕給ソ」ト云テ止ヌ。「大坂勢ハ夜ニ入ケレハ、早々引取ケル」ト云々。伝云、木村長門守モ、未明ニ伊達正宗カ先鋒、片倉小十郎ヲハ討散タリト云ヘトモ、少勢也。味方ハ不<sub>レ</sub>統閑東ハ猛勢也。殊更、上総介殿荒手入替ケル故、味方勞タレバ中々引取ハ悪カルヘシ。所詮、討死ト極スンハ、却テ討死スヘシ。各モ思切テ討死ト極給ヘト云テ機ヲ勸<sub>一</sub>待居タル所ニ、閑東勢不<sub>レ</sub>懸ケレハ、夜ニ入テ早々引入ケルト云リ。

去ハ、小森伊豆ト云者ハ、数度再篇ノ覚有者也。主水備ノ武者振ヲ褒ケルニ、主水常々撰候ヒテ召置タルト云ケレハ、人々我等モ被<sub>レ</sub>撰タルカト思テ勇ケルト也。兩人共ニ好云分ト云ヘシ。去ハ敵前ニ於テ兵ヲ勇シムルヲ将ノ第一ノ謀ト云也。又、主水備ノ立様ノ悪キヲ人前ニテ不<sub>レ</sub>云引退テ云コト、道ニ叶者也。人前ニ於テ過

ヲ糺スハ、悪シキコト也。其人ニハ威ヲ失ヒ、我威ヲ長ス。去ハ、異見ヲハ隠密ニ云者也。異見ニコト寄テ、我徳ヲ拳コト倭好也ト云リ。又、絶所ヲ前ニシテ、備ヲ立コト別シテ習アリ。軍旅ヲ学テ、得悟仕給ヘ。無左ハ難知。又、玉虫対馬カ云分ハ悪シ。去ハ、合戦ニ位ト云コト有。対馬カ云所ハ、我对当ノ敵ニハ最也。去ハ、大坂ハ一城也。別ニ助ノ勢ナシ。殊ニ小勢ニテ其朝片倉カ勢討散疲タル兵也。何ニ依カ、明日ヲ期スヘキヤ。此道理ヲ分別セス、我对々ノ敵ト勝負ヲ争如ク、明日ト云コト不<sub>レ</sub>当<sub>レ</sub>利。関東勢ハ猛勢ナレハ、譬上総介殿打負給フ共、始終関東ノ負ト成コトニ非ス。少成トモ、大坂勢ヲ討時ハ、城内ノ弱ト成。如此道理ヲ分別セスシテ止ケル者也。去ハ、笹ヶ瀬カ云分ハ、理ニ当テ覚侍ル。足輕ノ懸テ様子悪クバ引迄ゾ。引取兼ハ討死迄ゾ。蒐引自由成ヲ以テ足輕トハ云ナメリ。如此ノ儀ヲコソ詞ノ高名トハ云ヘケン。去ハ、聖人ハ能譬ヲ執ト有時ハ、足裏ニ食粒ガ附テモ自由ニ不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊行<sub>一</sub>者也ト云コト、誠ニ能云分也。是ヲ手本トシテ、能物ノ道理ヲ分別シテ、道理ノ近ク聞ルガ如ク宣ヘ。吾モ是ヲ手本トシテ思ハ、六尺ノ男足裏ニ粟ノ隠家ガ立テモ、自由ニハ不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊行<sub>一</sub>者也ト云ハ、今少シ好聞ナンカ。然トモ、時ニ至テ好其道理ヲ云分タル者ハ希成者也。能物ノ道理ヲ知テ、弁舌ヨク其道理ヲ云分ヌル者ハ、羨シキ者也。去ハ、利根・利発・利口、此三品有コトヲ了知仕給ヘ。我身ニモ又、此三ツ内得物アリ、不得コトアリ。其不足ヲ知テ、増補仕給ヘ。人ノ善悪ヲ知程ナラバ、我身ノ善悪ハ、猶以可<sub>レ</sub>知コト也。其不足ヲ知テ嗜習ベキ物也。此旨了得仕給。

①モ (大・金)。

一 江州志津岳合戦ハ、天正十一癸未歳也。其時ノ主人ハ不<sub>レ</sub>覚、大崎玄蕃ト云者、未若輩ニシテ在シガ、戰場山ニテ有シニ、山ヲ半分登リ余ニ困勞シテ、「最早成間敷。爰ニテ腹ヲ可<sub>レ</sub>切」ト云ケレバ、玄蕃家頼ノ老臣ガ云ク、「死所ハ今少シ山ノ上也。爰ハ可<sub>レ</sub>死所ニ

非ス」ト諫テ山ヲ登セ、高名ヲトケサセテ、覺ノ者ト成。(此玄蕃一説ニ士大将ト成ト云)以後ニハ、福嶋左衛門大夫殿ノ家老ト成。大夫殿左<sub>ニ</sub>迂<sub>セシ</sub>任給テ、以後ハ紀伊大納言頼宣公ニ被<sub>レ</sub>召出、知行一万石被<sub>レ</sub>下ケルト也。然共、男ノ子共常ニ糶汁ニ黒米飯ヲ喰セ、「武士ハ不達者ニテハ役ニ不立モノ也」トト<sub>①</sub>云テ、一日ニ一・三里位ツ、歩行スルコトヲ勤サセケルト也。

去ハ、玄蕃若輩故ニ、困勞ノ余ニ腹ヲ可<sub>レ</sub>切ト云コト、若輩ニテハ左モ有ナン。然ルニ、家来ノ何某「爰ハ可<sub>レ</sub>死所ニ非ス。今少シ山ノ上ニテ死給ヘ」ト云コト、扱々好高名ト可<sub>レ</sub>云者歎。是ハ併玄蕃カ親ノ功トモ云ヘシ。其故ハ、好者ヲ撰テ子ニ附ヌルコトハ、親ノ功ニ非スヤ。去ハ、善者ヲ撰テ子ニ附ルコト、父ノ慈ト云也。若又、善者ヲ撰テ附ルコト、不<sub>レ</sub>成程ノ身ニ於テハ、善友ヲ撰テ交ヲ厚ク成シムルコト、第一ト云ヘシ。玄蕃大身ニ成テモ、梅先非子共ニ其コトヲ習シムルコト、能武士ノ手本也。大形人ニハ、侈リト云者有テ、古ヲ忘コトハ常ノ習也。然ルニ、大身ニ成テモ其コトヲ不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>昼夜勤サセケルコト、武ノ根本ト可<sub>レ</sub>謂者歎。去ハ、古ハ関東戦国ノ時分ノ武士ハ、食後ニハ老若共ニ大道ヘ出テ、引目ヲ付テ飛習ケルト也。然ル故ニ、三間余程モトヒヌル者有シトカヤ。又、棹ヲ一本以テ走懸テ屋根ヘ登ルコトヲモ仕習ケルト也。是ハ定テ堀ヲ越、堀ヲ乘ヌル稽古タルベシ。当世ハ不<sub>レ</sub>心懸テ表ニ立、毎<sub>レ</sub>物人任セニ成者ヲ心好者ト云。少シモ武ヲ琢者、道理ヲ云者ヲハ冷カリケル風俗也。覺有者ハ、明日兵乱共云ハ物ノ用ニハ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>立。覺有世ニハ心懸テモ、解怠耳出来テ心懸ウスク成ベシ。能々心ヲ励シテ武ヲ勤給ヘ。左云バトテ、武士タテモ見苦シキ者也。心ニ不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>忘、勤然ト云コト也。此旨、思量仕給ヘ。

①三本共通するが、衍字ならん。

一 甲斐ノ信玄足輕大将ニ、大熊備前カ孫ニ、大熊七蔵ト云者、甲州没落以後浪窄ノ身ニテ、甲州在郷ニ被<sub>レ</sub>官共ニ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>「養育」。又ハ寺

院ニ入テ、茶挽ナドシテ其日ヲ暮ケル。于時慶長ノ比、被官共ニ向テ謂ケルハ「聞及ニ武州江戸ト云所、繁昌仕タル由也。江戸へ出テ奉公ヲ仕テ可<sub>レ</sub>見ト思フハ如何有ヘキヤ」ト云ケレハ、被官共「夫ハ如何ニモ能<sub>レ</sub>侍御出アレカシ」ト申ケル。多キ被官ノ内、「兩人御供可<sub>レ</sub>仕ト云ヌ。左有ハ武士ノ奉公ニ行ニ具足ヲ不<sub>レ</sub>持シテ可<sub>レ</sub>行ヤウナシ」ト云テ、備前以來ノ古具足ヲ被官共ニ負セ、自身モ替ル々負テ武州江戸ヘ下リヌ。扱、江戸ニ於テ酒井左衛門尉殿へ足輕ト歩行ノ者トノ問タホドニ在付ク。常ニ台所食ニテ左衛門尉殿遊行給フ時ハ、駕ノ後ニ供ヲ勤ヌ。七藏被官兩人モ面々ニ他所へ為<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>奉公<sub>一</sub>置ヌ。角有所ニ大坂御陣ト云沙汰有。其節、七藏被被官ノ方へ行テ呼出シ、大坂御陣ト云ガ如何ト云所ニ、残一人ノ被官今ノ主人ノ手前ヲ走テ来リ。「唯今此者ト連達テ參大坂エノ御供可<sub>レ</sub>仕ト存知誘引ニ參侍ル」ト云。七藏「能<sub>レ</sub>コソ」ト悦テ兩人ヲ召連罷歸リ、左衛門尉殿供仕テ登ケルニ、箱根ノ峠ニテ見セニ狐ノ皮ノ有ケルヲ三十錢ニテ買取テ、重代ノ甲ハハゲテ見苦シカリケルヲ狐ノ皮ニテ包、則狐ノ尾ヲ前立物ニ用タリ。然ニ、大坂夏陣ニ左衛門尉殿御人数ハ夥シク崩ケルニ、彼七藏モ不<sub>レ</sub>心成<sub>ニ</sub>被<sub>一</sub>押立<sub>ニ</sub>、細川越中守殿御手先へ行ヌ。其割<sub>①</sub>越中守殿寵愛ノ兒小姓敵ト組テ既ニ被<sub>レ</sub>討ヌト見ヘケル所ニ、彼七藏、「酒井左衛門尉内大熊七藏ト云者也。御助申ヌ」ト言テ、上ナル敵ヲ突倒シ、小姓ニ首ヲ為<sub>レ</sub>捕ヌ。其後、我モ首執テ越中守殿御前へ參、「酒井左衛門尉内大熊七藏ト申者ニシテ侍ル。御手先ニテ執侍ル俣指上侍ル」ト云テ上ヌ。扱、左衛門尉殿へ帰来テハ兎角ノ義ヲ不<sub>レ</sub>云ケレハ知ル人ナシ。其後世治テ以後、左衛門尉殿へ細川越中殿・伊達正宗、其外大名衆余多饗応有ケルニ、其席ニテ四方山ノ物語有ケルニ、越中守殿宣ヒケルハ、「尉殿ノ御内大熊七藏ハ、于<sub>レ</sub>今無事ニテ居侍ルカ、久シク不<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>対談<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>呼出<sub>ニ</sub>侍<sub>レ</sub>。対面仕度」由宣ヒケレトモ、左衛門尉殿覺不<sub>レ</sub>給。故ニ、兎角云紛カシ<sub>②</sub>耽々返事モ不<sub>レ</sub>仕給、勝手ニ入給ヒ家老共ヲ召テ「我内大熊七藏ト云者有由、

『功名咄』三(中卷ノ上)

越中守殿可<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>対面<sub>一</sub>由也。惣別越中守殿為<sub>レ</sub>浮事ナド宣フ人ニ非ス。定テ小身ナル者ノ内ニ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之、面々ニハ不<sub>レ</sub>覺矣。被<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>穿鑿<sub>一</sub>ヨト也。家老共モ不<sub>レ</sub>知シテ、家中ノ侍共ニ穿鑿仕ケレトモ不<sub>レ</sub>覺。歩行ノ者ノ内ヨリ謂出ケルハ「毎ト御駕ノ後ニナマ長キ男ノ御供仕候ヲ慥ニ大熊七藏ト申侍テ御台所食ニテ罷仕候也。台所へ御穿鑿侍レ」ト也。夫故イヨ々御尋有テ、大熊七藏ト云者在トハ知給ヌ。扱、座シキヘ出給ヒケルニ、越中守殿先刻モ如<sub>レ</sub>申侍<sub>一</sub>大熊七藏是居侍ハ対面仕度侍ルト也。左衛門尉殿、七藏コト唯今国本ニ罷在。是ニハ不居侍由ヲ宣フ。越中守殿、「扱々尉トノニハ能者ヲ持給フ者哉。知行ハ如何程給置侍ルソ」ト也。左衛門殿、「我等小身ニ侍レハ、漸七百石為執置侍ル」ト也。越中守殿、「責テ千石ハ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遣コト也。我等方へ給候へ。二千石ハ可<sub>レ</sub>遣侍。平更我等ニ被<sub>レ</sub>下侍レ」ト也。其時、正宗宣ヒケルハ、「様子ハ不<sub>レ</sub>存候共、我等所へ給候ハ一万石遣候ヘシ」ト也。左衛門尉トノ何方へ遣シ申者ニテ無御座由ヲ宣フ。又越中守殿、「扱、役儀ハ如何ニト問給フニ、「預<sub>ニ</sub>足輕<sub>一</sub>城代ニ仕置侍ル」ト挨拶也。故ニ、忠興モ役儀ハ宣侍ルト也。正宗、越中守殿へ様子ヲ尋給フニ、大坂表ニ於テ、如此ノ働無<sub>ニ</sub>比類<sub>一</sub>由ヲ物語仕給フ。正宗モ、「扱々能者ヲ持給フ者哉。被<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>御秘藏<sub>一</sub>侍レ」ト也。其故、件ノ客衆退散在テ彼七藏ヲ被<sub>レ</sub>召出、則知行七百石ノ折紙ヲ被<sub>レ</sub>下。明日在所へ可<sub>レ</sub>參由被<sub>レ</sub>仰付<sub>ニ</sub>御知行所へ下向ス。七藏カ兩人ノ被官モ供仕ス。其後、次第ニ立身シテ、二千五百石迄仕上ケルト云々。

誠此七藏、名有者ノ子孫タルニ依テ、其心嗜有ケル故、一度ハ落ブレケレトモ、武ノ心懸少モ心ニ無<sub>ニ</sub>解怠<sub>一</sub>。物数寄迄モ好カリシコト、再家ヲ興ヘキ前表タルベシ。去ハ、我心ニ善心発ハ興<sub>ニ</sub>家<sub>一</sub>、悪心発ハ可<sub>レ</sub>破<sub>ニ</sub>家前表<sub>一</sub>ト知給へ。大坂表ニ於テ、不<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>心被<sub>一</sub>押立<sub>ニ</sub>ケレトモ、心ニ無<sub>ニ</sub>怠<sub>一</sub>武ヲ心懸働ケル故、自露頭仕タリ。陰徳陽報ノ道理有コト悟給へ。「武士ハ毎事陰徳ヲ行ヘキコト專<sub>一</sub>也」ト、楠正成息正行へ遺書ニモ仕給ヒケルコト最也。其身ニ徳ヲ積給ハ、

ナトカ天ノ時可レ不到矣。去ハ、此七藏自体大勇ノ男成故、働ヲ輕ク思ヒケル故、歸來テ不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>「物語」。如<sub>レ</sub>此ノ曲者世ニ多シ。扱又左衛門尉内大熊七藏「御助申」ト旬テ上ナル敵ヲ突倒シ、小性ニ首ヲ為<sub>レ</sub>執ケルコト、最潔心也。扱我モ首ヲ執タルコト剛強第一ト云ヘシ。夫故天ノ慈モ有テ、其徳自顕タリト云ヘシ。人トシテ落ブル、コトモナトカ無ラン。左有時ハ、此七藏ヲ手本トシテ、盡未來武ヲ無<sub>レ</sub>怠、屍ノ上迄モ骨ヲ清クセント大丈夫ノ心ヲ起テ勳給ヘ。

①刻(大・金)。

一 寛永ノ比、松平安芸守光晟ノ家頼、前田伊織ト云者、為<sub>レ</sub>「使節」ト江戸ヘ下向シ上リケル時ニ、尾州熱田ヨリ勢州桑名ヘノ渡船ニテ難風ニ逢フ。船忽ニ屈覆シテ、数人失<sub>レ</sub>命。其中ニ前田伊織ト船頭一人トハ屈覆タル船ノ底ニ登テ暫ク居ケルニ、伊織船頭ニ云ケルハ、「逆モ水ニ溺テ死ナンヨリ腹ヲ切ヘシ」ト云ケル時、又浪風荒クシテ船返覆シケルニ、彼船頭一人ハ無<sub>レ</sub>難助カリケル。伊織死骸ヲ後ニ取揚テミケルニ、最前云シ如ク腹一文字ニ搔切テ死タリ。人々、「惜キ男哉。越前カ子程有テ、水ニ溺テモ不<sub>レ</sub>驚不<sub>レ</sub>周章能腹ヲ切タル者哉」ト、拳<sub>レ</sub>世賞美セシト云々。誠ニ此伊織、其詞ヲ不違、水底ニテ腹ヲ切ケルコト、丈夫ナル男ト云ベシ。然トモ、今此ヲ思量仕テ見ニ、若キ人ハ左モ有ナンカ。同クハ亡命ノ限、櫓ニモ楫ニモ帆柱ニモ取付テ、波風ヲ凌テ助リテ可<sub>レ</sub>見コト也。腹ヲ切シハ短慮ニ覺侍ル。万一ナラズ船頭一人助カリシ時ハ、伊織モ助カル間シキ道理モナシ。左有ハ、一旦潔シト云トモ、押テ其理ヲ云ハ、短慮ト云ヘシ。去ハ、天正年中ニ明智日向守殿叛逆ノ時、織田城介殿二條ノ城ニ櫓籠給シニ、日向守ハ三千余騎、城内ハ結句六千余有シカトモ、明智是程ノ大儀ヲ企ヌル上ハ、定テ宇治・勢田ヲ差塞タルベシ。大和ニ筒井順慶アリ。摂州大坂ニ織田七兵衛アリ。若狭ニ細川越中守忠興在リ。此者其

ハ皆日向守カ智ナレバ、可<sub>レ</sub>遁出<sub>レ</sub>様ナシト思量仕給ヒテ、兎角ヲ忘怖シテ御切腹在シトカヤ。以後ニ、是ヲ聞時ニ一円ニ左ナクシテ、何方ヘ引退給フトモ、易カルヘカリシト也。天運トハ云ナカラ、誠ニ無<sub>レ</sub>謂甲斐<sub>レ</sub>仕方、未代迄殘<sub>レ</sub>汚名<sub>レ</sub>給フト可<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>懼ヘシ。諭我一人ヲ千万人ノ敵執卷テ討テカ、ルト云トモ、亡命ヨリ外ニ別ノコトナシ。然ル故ニ、武ノ本意ハ千万ノ敵ヲモ随分切抜テ可<sub>レ</sub>見者也。去ハ、劍術ノ歌ニモ「切結太刀ノ下コソ地獄ナレ、切抜タラハ末ハ極楽」トヨメリ。如<sub>レ</sub>此諸事ヲ武士ハ勝負ノ道理ニテ悟給ヘ。一人モ拾人モ百人モ千人モ万人モ、勝負同コト也。十八一ノ変、百八十ノ变、千八百ノ变、万八千ノ变ト云コト有。一ヨリ十、十ヨリ百ト重テ、命ヲ限働テ可<sub>レ</sub>見コト勿論也。故ニ、伊織カ仕方一旦ハ潔ト云トモ正理ニアラス。此旨ヲ思量仕御座在。

一 万治・寛文ノ比、丹州宮津ノ城主、京極丹後守ドノ家頼、西脇甚五左衛門ト云者アリ。此者兄ノ敵ヲ持タリ。数年心懸ケレトモ不得時節シテ不<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>本意。此敵ハ武州江戸ニテ置者截ノ上手、山野加右衛門カ從弟也。故ニ、江戸ニテ法城寺ト云鍛冶ニ大小ヲ為造、二ツ脰ヲ強々ト様テ指タリトカヤ。此者京都ヘ昇リ在出聞ケル<sup>①</sup>ハ、丹後守トノニ暇ヲ乞、宮津ヨリ京都ニ出テ吾家頼ヲハ不連、京都ニテ日用ノ者ヲ一人ヤトヒテ案内者ニ召連、洛中・洛外寺社毎日見物ス。然ル所ニ、七條河原ニテ彼敵ヲ見付、編笠ヲ脱日用ニ持セ云ヤウ、「吾ハ彼敵ヲ可<sub>レ</sub>討トテ此比方々ト仕タリ。其方ハ何方ヘモ行ヘシ。我ハ勝負ヲ仕テ、其以後如何様トモ可<sub>レ</sub>成假立退候ヒ<sup>②</sup>」ト云テ、後ヨリ追駈言葉ヲカケ、刀ヲ抜テ截合ケル。覺有所ニ、彼日用ノ者、河原ニ有砂ヲ編笠ニ入テ、敵ノ方ヘ投掛、「能々被遊候」ト云テ混物掛ケル俣、敵彼砂ニ迷惑ヤ仕タリケン、運ヤ盡タリケン、力<sup>③</sup>ヲ打折、脇指ヲ抜テ戦ケレトモ、砂目口ヘ入ケル俣、終ニ甚五左衛門ニ截倒サレケル。甚五左衛門、留ヲ指丹州ニ帰ル故ニ、最前知行百五拾石執シガ、一倍ノ加増ニテ三百石ニ被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>

ケルト云々。

誠ニ、此甚五左衛門勇剛ノ武士也。又、日用ノ者モ臆病ナル者ニハ不<sub>レ</sub>可有。然トモ敵剛強ニ、甚五左衛門臆シテ危ク見ハ如何シテ砂ヲ可<sub>レ</sub>掛矣。早ク可<sub>レ</sub>逃者也。去ハ、遣<sub>④</sub>兵法ニ不<sub>レ</sub>限、万芸共ニ一心ヲ第一ト云コト、是也。一心臆シテハ、万芸皆消滅シテ其益有コトナシ。甚五左衛門勇剛ナルニ依テ、日用ノ者モ助力<sub>⑤</sub>シ者也。一心勇猛ナレバ、不<sub>レ</sub>覺時ノ幸出来ヌルコトヲ悟給ヘ。此甚五左衛門カ勇猛ナル故ニ、日用ノ者砂ヲカケシ如也。伝ニ聞、乱世ニハ強方ヘハ合力シ。弱方ヲハ見捨ルコト世上習也。是故ニ、砂ヲカケシモ甚五左衛門カ手柄ト云ベシ。又世上ニ余リ一心ヲ第一ト為<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>謂、万芸ハ無<sub>③</sub>所益。唯一心ヲ善ケレハ、勝負ニ勝ト云者有。是モ亦偏僻也。左云ハ一心剛強ナラバ、女童ニモ可<sub>レ</sub>負矣。武芸ヲ不<sub>レ</sub>知ノ心ノ剛強ナルハ、女ノ心剛強ナルガ如シ。是ニモ若又油断ヲ成ハ負ナンモノ也。如此品々ヲ能々得悟仕給ヘ。

①「レ」となるべき所、「金」はやや「レ」に近い。②三本とも「ヒ」だが、「へ」となるべきか。③刀(大)。④「遣」の文字金になし。「鑓」のことか。⑤三本共通すれど「セ」の脱か。

一 永祿十二己巳歲四月上旬、小田天南入道氏晴雜兵五卒ヲ卒シテ、常州真壁ニ発向ス。真壁道無ハ氏晴西表ニ向フト聞テ、ナメリ川ト云所ニ馳向ノ所、氏晴南ニ向フト聞テ、真壁直ニ乙畑筋<sub>①</sub>ニ馳向。然トモ、西表モ無<sub>②</sub>心元カ、リケレバ、老兵少々残置、其勢三百騎計ニテ馳向、小田勢ヲ切崩ス。小田勢夥敷敗軍仕テ大勢被討、唯手足ニテ如<sub>③</sub>匍シテ逃崩ケレハ、其所ヲ手匍坂ト名付タリトカヤ。此時道無ノ一男安芸守殿ハ、生年拾五才ニ成給フヲ、道無ノ家頼ニ坂本信濃ト云老功ノ兵アリ。此者ヲ召テ、「能時節也。安芸守ヲ執飼テクレヨ」ト被<sub>④</sub>仰付。信濃「畏リ侍ル」ト云テ、安芸守殿ト馬ヲ乘并逃行小田勢ノ中ニ乗込タリ。爰ニ朱具足ヲ着シ、鎌鑓ヲ以テ退兵有。信濃此武者ヲ「被遊侍レ」ト乗廻シ、鑓ヲ突掛

「功名咄」三(中卷ノ上)

ル所ニ、安芸守殿頓テ馬ヨリトビヨリ引組テ、上ニ成下ニ成坂下迄、コロリトコロヒ落給ヒ、信濃ハ馬ヨリ不<sub>レ</sub>下「好被遊候ヒ々」ト詞ヲ奉<sub>⑤</sub>掛テ、馬ヲ乘廻シ々見物ス。然ル所ニ、芝士居ノ在所ニ落留ケルニ、既ニ敵安芸守殿ヲ執テ押エ脇指ヲ取テ指殺サントスル所ニ、安芸守殿ノ馬執其腕ヲ執テ仰向ニ突倒シテ奉<sub>⑥</sub>為<sub>⑦</sub>捕首ヲ。其後、安芸守殿ノ御供シテ、道無ノ御前ニ參ケルニ御感不斜。偏ニ信濃カ武功故ト感シ宣フ。其時、信濃カ申上ケルハ、「円ニ非<sub>⑧</sub>左。如何ニ鷹匠ガ上手ニテモ、二物ノ鷹ハ不<sub>レ</sub>執物ニテ侍レ」ト申上ケルハ、道無「最」ト御意有テ、弥喜悅仕給ヒケルト云ヘリ。又安芸守殿ノ馬執モ此働ニ依テ、其場所芝士居ニテ有シトテ、芝士ト云名字ヲ被<sub>⑨</sub>成<sub>⑩</sub>仰付、初テ侍ヒニ被<sub>⑪</sub>仰付。其以後、数度武功有ケレバ、芝内膳ト被<sub>⑫</sub>名付ケルト云々。

誠此道無、其身小身也ト云トモ、其比関東ニ武功高キ人也。近隣ノ諸將ト毎<sub>⑬</sub>戰以<sub>⑭</sub>小勢大軍ヲ切崩コト多シ。故ニ、家頼ノ面々モ手痛働モ多シト云ヘリ。去ハ、信濃数度ノ武功有故ニ、安芸守殿ヲモ預給ヌト能執飼スル者也。浮雲<sub>⑮</sub>氣モナク奉<sub>⑯</sub>組、馬ヨリ不<sub>レ</sub>下、乗廻々奉<sub>⑰</sub>掛<sub>⑱</sub>詞見物セシ事、最成間数<sub>⑲</sub>コト也。然トモ、馬執ノ芝内膳ガ在テ危見ヘハ可<sub>レ</sub>奉<sub>⑳</sub>助氣情顯也ケルニ依テ、馬ヨリ不<sub>レ</sub>下者歎。又ハ外ヨリ敵助来コト有シカトノ用心タルベシ。是ハ扱置、帰来テ道無ノ前ニテ如何ニ鷹匠ガ上手ニテモ、二物ノ鷹ハ不<sub>レ</sub>執物テ侍ルト云コト、誠ニ数<sub>㉑</sub>勝千万成謂分ト感スル所也。東夷ト卑<sub>㉒</sub>メテトモ上方武士ノ可謂詞トモ不覺。角武ノ道達シヌレハ、覺<sub>㉓</sub>ヤサシキ花モ咲ケルモノナランカシ。可<sub>㉔</sub>羨コトハ覺有一言ナルヘシ。又、芝内膳カ手柄モ時ニ執テノ高名ト云ベシ。如<sub>㉕</sub>此物語ヲモ茫然ト聞カンハ、真実ノ武士ニハ非ス。能々嗜御座在。

①敷(大・金)。②殊(金)、なお「スセウ」の訓みあり。③「卑」に「イヤシ」のルビ(大・金)。

一 元和ノ比ヲヒ、美作国住人竹ノ内藤一郎ト云者、執手ノ上手ニテ

諸国修行者ニテ執手ヲ教ケルニ、五畿内ニテ其所ハ不覺、家頼ノ若党ニ藤一郎月額ヲ為<sup>リ</sup>割ケルニ、髻ヲ削ケル時、俄ニ両手ノ力身ケル故執テ押エ、則面縛仕遂<sup>ニ</sup>噉<sup>ル</sup>ケルニ、家頼共一兩人云合セ、藤一郎吭ヲ搔テ諸道具ヲ執可<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>逐電<sup>一</sup>功<sup>一</sup>也。故ニ、同類不殘成敗仕テ其難ヲ避ケルト云々々。

誠ニ、此藤一郎得<sup>レ</sup>名タル上手ナルニ依テ、其枢機ヲ知テ其難ヲ避ケルコト、微妙ト云ベシ。髻ヲ為<sup>リ</sup>削ケルニ、両手ノ俄ニ力身ナシト思当テ執テ押エケルト也。去ハ、武士ハ諸事ニ如此心ヲ附スンバ有ベカラス。小疑ノ下ニハ小悟有ト云ト不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>忘。少シ成トモ怪キコト有バ色ニハ不<sup>レ</sup>出トモ心ヲ附テ置時ハ、心其心根露顯スル者也。去ハ、古歌ニモ「左モアラス人ノ親ク問寄バ如何成コトヲ胸ニ持ラン」ト読リ。此枢機ヲ知ト云コト、心徳ノ大事也。心裏静ニアラスンハ知コト難<sup>レ</sup>成。能々工夫仕給へ。

①巧(大・金)。

一 寛文ノ比ヲヒ、江戸御旗本ニ金松又四郎殿ト云人有。此人若キ時分柳生但馬守殿ト被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>対談<sup>一</sup>ケル砌、自然誼咄・口論有時、障ルニハ一人ヲハ蹴倒シ、一人ヲバ不<sup>レ</sup>組伏<sup>一</sup>不被<sup>レ</sup>障遂<sup>一</sup>者也。譬ハ被<sup>レ</sup>蹴タルトテ当相手有故、其人ト意根云者テ非ス。自然ニ謂トモ「其ハ何トソ可<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>俣、右ノコトクスベシ」ト被<sup>レ</sup>語シニ、「最」ト同シテ被<sup>レ</sup>打忘<sup>一</sup>在シ。或時、若キ衆ト參会セシニ、一ツ二ツ口論有ト早脇着ニ掛<sup>レ</sup>手メ<sup>一</sup>リ。又四郎殿不覺一人ヲ蹴倒シ、一人ニハ抱付ケル。其後、座中ノ面々立騒、双方ニ執分<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>致<sup>一</sup>和談<sup>一</sup>ケルト也。其後、又四郎殿、「乍我能出合シ物哉ト思ヒ、折<sup>レ</sup>手テ但馬守殿物論ヲ被<sup>レ</sup>聞年数被<sup>レ</sup>算シニ、拾五年ニ成ケルト也。兎角能物語ヲハ聞覚度者也」ト又四郎殿被<sup>レ</sup>語シト云々。

誠、善物語ヲ聞覚度ト思フコト、平常ノ学問也。智ヲ求ルト云コトモ是也。不<sup>レ</sup>知コトヲハ芻樵<sup>一</sup>②(クサカリキコリ)ニモ尋問コト恥辱ニ非ス。去バ、聖人モ、「不<sup>レ</sup>知ヲハ不<sup>レ</sup>知トセヨ。知シ<sup>一</sup>ルヲ知レル

トセヨ。是知ル也」ト宣ヒシ。昔物語ヲ余多聞覚テ時ノ宜ヲ用ルヲ智ト云。又、昔物語ヲ聞テ時ニ不<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>相応<sup>一</sup>ヲモ不<sup>レ</sup>知、如<sup>レ</sup>昔有ノ俣ニ用ルヲ法氣トハ云ト也。又、如何ン<sup>一</sup>④能物語ヲ聞テモ時ニ相応・不相応ヲモ不<sup>レ</sup>知、又其時ニ当テ如不<sup>レ</sup>出<sup>一</sup>会<sup>一</sup>ハ不器用、又ハ愚鈍ト云テ、不<sup>レ</sup>及<sup>一</sup>是非<sup>一</sup>所也。彼又四郎殿モ器用人ト云ベシ。吾モ如此昔物語ヲ書付置コト、若モ武ノ家ヲ継ガン男子在テ是ヲ見バ、九牛ガ一毛程成トモ武ヲ助ルノ道也。又ハ、子孫ニ慈ノ道共思ヒ、末ニ評判ハ偏僻ナル理ヲモ験侍ル者也。若モ思誤コト有バ、我子孫我ヲ助ノ道也。善改札給へ。武ノ家ニ生テハ少時モ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>一</sup>油斷<sup>一</sup>⑤(スルトコト)最也。

①タ(大・金) ②右ルビの「ノ」は原文のママ、大も同じ、金はルビなし。③レ(大・金) ④ニ(大・金)。

一 永祿・元龜・天正ノ比、常州真壁道無ノ家頼ニ酒川刑部ト云者アリ。或時、結城晴朝ノ軍勢真壁ニ発向セシニ、彼刑部十三才ニ成ケル一子ヲ召連テ出陣ス。角有所ニ、晴朝ノ備ヨリ武見<sup>一</sup>①ノ武士ト見ヘテ、武者二騎進出テ乘廻ケルニ、刑部世倅ニ目合シテ乗出ケレバ、一子モ馬ヲ乗出シ親ト乘并テ馳行ケル。武見武者ハ是ヲ見テ馬ヲ戻シ、一騎ハ川端ニ附テ引、一騎ハ山際エ別々ニ成テ引退ケルニ、刑部一子ニ向テ、「眼ヲハツチト明テ被<sup>レ</sup>討。敵不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>討敵ヲ能見テ討」ト謂テ、山際エ掛テ退敵ヲ追掛、子ノ方ハ二目ト不<sup>レ</sup>見。一子ハ川端ニ附テ退敵ヲ追詰、頓テ馬ヨリトビヨリ、敵馬ヨリ下ントスル所ヲ九寸五分ノ鎧通ヲ引抜テ草摺ヲ壹揚引落シ様ニ指通シ、混クリユクリテ起シモ不<sup>レ</sup>立首ヲ執。刑部ハ其時、漸山際ノ敵ヲ討取テ来リ。「扱モ能仕タリ」ト誉テ、親子乗連テ本陣ニ帰ケルトカヤ。此子モ後ニハ、則親ノ名ヲ付テ居タリケルガ、或時北條氏政ノ軍勢ト真壁ト戦ケルニ、其所ハ不覺、二王門ヲ片扉明テ責合ケル時、北條方ヨリ大勢込入ケルニ、後ノ刑部鎧ヲ以テ出、数百人夥敷突崩スコト数度也。然ル故ニ、鎧ヲ取替々々七本

迄突折給ヒ、其場ヲ不<sub>レ</sub>去討死仕タリト云々々<sup>②</sup>。

誠ニ、刑部武功ノ者故、子共ニモ常々謂教ケル。然共、子ヲ思ノ心猶深カルベシ。其子敵ヲ討兼サル器量ヲ見知テコソ未若年成ト云ヘトモ召連テ出陣仕ツラン。去ハ、虎ノ子ヲ多ク産テ其子ヲ石壁ニ墮ニ、省テ怒ラハ子トシ、不恕則喰殺スト云リ。其如ク武士モ我子ヲ死地ニ墮シテ切抜ル如クノ子ニ非ズンハ、武ノ家ヲハ難繼、刑部モ如此道理ニ依テ、死地ニ墮テ不構先ニ進ツラシ<sup>③</sup>。又ハ、見所有テ山際ヲ退敵ニ我ハ掛リ、川端ノ敵ヲ子ニハ討セツラン。去ハ、敵味方鎧ヲ以テ懸相時、地強敵ハ難<sub>レ</sub>討者也。地弱敵ハ討安者也ト云コト、武ノ秘伝也。去ハ、其子モ武ノ家ヲ保耳ナラス、鎧ヲ七本迄折討死センコト、誠ニ武ノ家ヲ相統シテ、其名ヲ上シコトハ大孝ト云ヘシ。又、小脇指ヲ以テクリ倒シ、組討ニ仕タルハ善手柄也。常々功有物語ヲ聞覚、吾モ心懸ズンハ角有働ハ難<sub>レ</sub>成アラン者歎。常ノ心懸ノ十分一モ戰場ニテハ出合間敷、常也。如此常々子ニハ教置テ、戰場ニ臨テハ突放テ勝負ヲ令<sub>レ</sub>致コト、虎ノ子ヲ石壁ニ墮<sup>④</sup>カ如シ。此旨了得仕給ヘ。

①「武見」のルビ「モノミ」(大)。②金は「云々」(金)。③ン(大・金)。④墮(大・金)。

一 天正ノ比、織田有楽ト云人在。此人ハ信長公ノ舍弟、信忠ノ伯父ニテ、世人不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>輕、若各<sub>ナ</sub>源吾殿ト云シ故ニ、世ニ有楽源吾殿ト云ケルト也。去ハ、明智日向守光秀叛逆ノ時、此人モ二條ノ城ニ籠給ヒシカ、信忠傷害ノ後落散セラレケルト也。其後程ヲヘテ、或者ノ宅ニ御在ケルニ、五・六才ニ成ケル男子ノ出タリケルニ、右ノ有楽源五、「扱々能子ヲ持給フ者哉。小歌ヲハ謡ガ<sup>①</sup>謡ヘ、聞ン」ト宣フ。亭主、「如何ニモ謡侍ル。御前ニテ何ゾ仕レ」ト馳走顔ニ云ケル。其比世ニ時花ケル小歌、「花ノヤウナル若君様ヲ、御腹メセトメメサセテ於テ、飛テ御逃ル源五殿」ト謡タ。亭主迷惑仕テ怒テ抱テ勝手ニ入ケルト云々々。

『功名咄』三(中卷ノ上)

誠ニ、通間敷所ヲ落散仕給ニ依テ、角有面目テ失ヒ給ヒケル者也。

実ノ忠義ヲ謂ハ、吾信忠ノ命ニ替、城ニ残テ敵ヲ防キ、信忠ヲバ一旦奉<sub>レ</sub>落ハ、万<sub>一</sub>此謀不<sub>レ</sub>調シテ被<sub>レ</sub>討給ト云トモ、数万年ノ後迄僻コト仕タルトハ云間敷。結局其働ヲ聞ヲハ泪ヲ可<sub>レ</sub>流コト無疑。然ルニ、讒ナル一命ヲ惜テ落散セラレタルコト、一身ノ恥辱耳ナラス、信長公ノ舍弟ニモ、角有弱者有カト不思議ニ思ヒ侍ル。此人ハ、武士ノ風上ニモ置マジキ男也。去ハ、一生ハ風前ノ燭、籠ノ内ノ鳥開ヲ待ニ<sup>②</sup>去ニ同シト云アゲナル身ヲ惜テ、万代不滅ノ名ヲ汚コト、誠ニ愚癡ナルコト也。此旨能<sub>レ</sub>勤弁仕給ヘ。但覺謂ハトテ一概ニハ心得ベカラス。其故ハ、昔越前国金崎ノ城落テ一ノ宮ヲ奉<sub>レ</sub>初、新田義頭其外一族余多死亡仕給ヒケルニ、舟田長門守浜辺ニ添テ落行ケルニ、或兵行向テ、「何モ歴々自害仕給フ所ニ、貴殿一人落給フコト不審ニ侍ル」ト云バ、舟田ガ曰ク、「新田ノ一族数ヲ盡シテ無<sub>レ</sub>殘」左モ有ナン。未タ世ニ多シ。左有時ハ如<sub>ニ</sub>我等<sub>一</sub>者一人成共生テダニ在ハ、味方ノ強リ也。イサ、セ給ヘ」ト云テ落行四・五人洞ノ内ニ隱居テ四・五日ヲヘテ、以後山ニ參ケル。義貞対面有テ誠ノ忠信也。以往ニ不<sub>レ</sub>義ナシ。臆仕タルコトナシ。仮ニモ虚語仕給ズ。今何ニ依テカ命ヲ惜テ覺来給ベキヤト涙ヲ流シ、古桶モ覺謂シナド物語仕給ヒテ賞美仕給フ。然トモ、傍ノ人ハ尚舟田臆シテコトヲ左右ニ寄テ遁<sub>レ</sub>死来レコトト謗<sub>レ</sub>ト也。去トモ、其以後モ又不義ナク臆仕タルコトナク、終ニハ新田義宗ノ命ニ替テ討死仕タリトカヤ。是コソ真実ノ武士トハ謂ベケレ。有楽ハ以後ニ覺有働有ト云コトヲ不<sub>レ</sub>聞。定テ茫然ト年老朽テ病死セラレシト見タリ。覺無<sub>ニ</sub>謂甲斐<sub>一</sub>汚名残セシコト、武家ノ恥辱此上ニ何ヲカ有ン哉。

①ガ↓カ(金)。②ニ↓テ(大・金)。③「コト」の原文は「ト」(コトの慣用略符号)であるが(コト↓リ)(大・金)。④レ↓シ(大・金)。

一 慶長ノ比、加藤喜介殿京都諸士代被<sub>レ</sub>遊ケル節、其家頼ニ坂東太郎

左衛門ト云者、兒小姓ニ大石ノ某ト衆道ノ知音ナリ。又、傍輩ニ其名字ハ不覺、又左衛門ト云者ト衆道ノ儀ニテ意恨出来、既ニ可討果「窮ケル俛、三人共ニ喜介殿ヲ暇ヲ乞テ立退ヌ。扱伏見於藤森可討果約諾有ケルニ、太郎左衛門ハ先ニ出テ茶屋ニ在テ、又左衛門ガ行粧ヲ見ケルニ、五・六拾人ニテ出タリ。太郎左衛門是ヲ見テ不<sub>レ</sub>出会、道ニテ札ヲ立置テ帰ケル。其文言ハ、「其方大勢ニテ出ルコト比興千萬也。相手向テ尋常ニ勝負ヲ決セヨ。大勢ニテ出ルニ依テ、不<sub>レ</sub>出会<sub>ニ</sub>罷帰ル者也」ト書タリ。又左衛門是ヲ見テ添書シテ曰、「其方ガ云所至極最也。乍<sub>レ</sub>去我カ催テ出タルニ非ス。聞付テ出タルハ不<sub>レ</sub>及是非<sub>ニ</sub>所也。左有ハ京伏見ノ中ニテ出会次第ニ可<sub>レ</sub>討果<sub>ニ</sub>間、随分其方モ遊行給ヘ。此方モ随分可<sub>レ</sub>遊行」由ヲ書添タリ。其比ハ京伏見全盛ノ時分ニテ、大名屋敷モ余多有シニ、太郎左衛門ハ本多三弥殿多門ニ在テ、出格子ヨリ大道ヲ見テ居ケルニ、彼又左衛門下ヲ通ケル俛、下人ヲ追駈サセテ、「又左衛門殿ニテハ無力、内々ノコトハ如何ニ」ト云遣ケレハ、「如何ニモ心得タリ。乍<sub>レ</sub>去今朝ヨリ方々遊行テ未空腹也。願ハ弁當ヲ拵テ越給ヘ。認テ可<sub>レ</sub>討果」由返事ス。太郎左衛門則弁當ヲ調遣ス。扱、太郎左衛門其時、大脇指ヲ指テ在シガ、自然又左衛門腹ヲ切テ指コト有バ「大脇指ニテハ不調法成者ナラン」ト云テ、大石ノ何某ガ小脇指ヲ指替テ出ケルト也。其場ハ伏見ノ河原ニテ、可<sub>レ</sub>討果ト也。兎角トセシ内ニ、双方聞付次第ニ馳聚ケル程ニ、両方共ニ二・三百ツ、在シトカヤ。扱両方ヨリ静ニ歩行出ルニ、間拾四・五間ニテ又左衛門刀ヲ抜ントス。太郎左衛門云ケルハ「又左緩リト仕給ヘ」ト云。又左衛門「最」ト同シテ不<sub>レ</sub>扱。間六・七間ニ成テ互ニ刀ヲ抜テ、静ニ歩行寄討合ケルニ、互ニ左ノ肩ト腕トニ当テ押合ケル時、太郎左衛門カ後ニ石ヲ取タル跡有ケル。此穴工足ヲ踏込真仰向ニ倒メ<sub>①</sub>リ。是ヲ見テ又左衛門、太郎左衛門カ上ヲ混ト乗テニツコト笑。角有所ニ太郎左衛門ガ方ノ者共、「ヤレ突々」ト云ケルヲ、上ナル又左衛門是ヲ聞、小脇指ヲ扱テ突。太郎左衛門左ノ

拳ヲ以テ払除々々セシ間ニ、下ヨリ小脇指ヲ扱テニツ三ツ指通ケル間、上ナル又左衛門日影ニ朝霜ノ如<sub>レ</sub>消成シトカヤ。其時太郎左衛門、上ナル又左衛門ガ<sub>②</sub>剗倒シ、起直テ留ヲ指立退シトセシ所ニ、又左衛門ガ方ノ者共、「退ハ太郎左衛門、比興也。遁スマシ」トテ走出。其時太郎左衛門方ノ者共、「左ハ云セマジ。最前ヨリ討勝ノ約束也」ト云テ大勢出向ケレハ、又左衛門方ノ者共、「扱モ無念ナルコトトモ也。不<sub>レ</sub>及是非」ト云テ、大勢本結ヲ扱テ去シトカヤ。扱又太郎左衛門、又左衛門ニ立向時、「直ニ不掛弓姿<sub>③</sub>ニ懸シ、如何ナル故ゾト、見苦敷カリシ」ト後ニ友達ノ尋ケレバ、「去ハトヨ、懸ケル時、敗軍星ヲ繰テ見ケルニ、我方ニ劍先向ニ依テ、敗軍ノ劍先ヲ脱ヲ<sub>④</sub>掛ケルト語シト云々。

誠ニ、此者共兩人トモニ剛勢者ト可<sub>レ</sub>云。勝負ハ時ノ運命ナレバ、不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>是非<sub>ニ</sub>所モ有ナン。太郎左衛門果シ場ニ先へ出テ、茶屋ニ隠居テ又左衛門大勢ニテ出ケルニ依テ、不<sub>レ</sub>出会<sub>ニ</sub>シテ札ヲ書テ立シモ最也。是ハ勇ノ上ニ有<sub>レ</sub>智ト云ベシ。兵法ニ曰、「千章万句致<sub>⑤</sub>シテ人不<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>人」ト云リ。又左衛門ガ返答モ誠ニ無<sub>レ</sub>偽。左モ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>コト也。又太郎左衛門ガ使ニ「空腹也」ト云テ弁當所望セシコト、勇氣有故何モ不思云遣シケルコト、誠ニ優ナル男ト見ヘタリ。太郎左衛門調遣コトハ義ノ当然ナレハ、誰モ左モ有<sub>レ</sub>ナンコト勿論也。太郎左衛門懸行内ニ敗軍星ヲ繰シハ、死ヲ何共不<sub>レ</sub>思剛強成故心静ナル驗也。又左衛門懸ナル時、刀ヲ抜ントセシ所ヲ、太郎左衛門ニ「静ニ」ト被云テ「最」ト同スルコト無<sub>レ</sub>詮コト也。余ニ敵ノ謂俛ニハ不<sub>レ</sub>成者也。太郎左衛門ガ如ク謂時ハ、緩リト扱テ、「能バ其方扱給ヘ」ト云テ、吾ハ可<sub>レ</sub>扱コト也。敵ニ術アランモ不<sub>レ</sub>知。又ハ、敵ノ云俛ニ余リ敵ノ自由ニ成モ負也。早ク扱タルトテ見苦シキ道理モナシ。去バ、敵ノ詞ニモ此方利有<sub>レ</sub>同シ無<sub>レ</sub>利同ス間敷者也。兎角又左衛門ハ、勇氣ハ牛角也ト云トモ、智ノ浅カ故ニ勝負ニ負タル成ヘシ。其故ハ、太郎左衛門倒ケル時、直ニ刀ヲ以テ不<sub>レ</sub>突。早勝タルト思ヒ、混ト上ニ乗テニツコト<sub>⑥</sub>ト笑シ所、智ノ

浅駭ナルベシ。自然ハ又不心成余ヲ上ニ乗ケルカ無<sub>レ</sub>覺東。去ハ、名將ノ歌ニ「勝テ甲ノ緒ヲソシメヌル」ト云ヘバ、勝テモ油断スマシキ者也。太郎左衛門カ上ニ乗テ小脇指ニテ突ヲ、拳ヲ以テ払除、下ヨリ突ケルコト、誠ニ物ニ不<sub>レ</sub>動男ト云ベシ。去ハ、我首ノ前ニ落テ以後迄モ可<sub>レ</sub>勵ト思結<sub>⑥</sub>スシハ、如<sub>レ</sub>此ニハ成間敷者也。又大石ノ何某ト云シ兒小性ハ、後浅野采女正殿、同内匠頭敷二代ニ勤仕セシ大石内蔵助ト云シ者也ト云伝侍ル。右ノ如ク成物語ヲ聞テモ勝負ノ道理ヲ能ク勘弁仕給へ。

①メトタ(大・金)。②ガトヲ(大・金)。③「姿」に「ナリ」のルビ(大・金)。④ヲトテ(大・金)。⑤ヨトコ(大・金)。⑥結↓詰(金)。

一 関ヶ原合戦、西国方討負テ以後、増田右衛門尉ハ、故有テ御赦免ニテ紀州高野山へ趣給フ。扱、和州郡山ノ城ヲハ増田右衛門尉渡部勘兵衛ニ預、軍勢ヲ籠置タリ。東国方藤堂佐渡守殿後二和泉守ニナリ郡山ニ趣、城ヲ明渡ベキ由被<sub>レ</sub>仰入<sub>①</sub>ケレハ、勘兵衛返事シテ曰、「此城ヲ保持レドモ事終<sub>②</sub>可<sub>レ</sub>開<sub>③</sub>運無<sub>④</sub>道理」。然トモ、増田右衛門尉如<sub>⑤</sub>我等<sub>⑥</sub>者ヲ人ケ間敷被<sub>レ</sub>預置タルコト面目余身所也。故ニ卒尔ニハ渡ス間敷。右衛門尉方ヨリ城相渡シ候ヘトノ墨付於<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>来城ヲ枕トシテ討死仕ル覚悟ニ侍レ」ト云テ不<sub>レ</sub>渡。故ニ、其故<sub>①</sub>權現様へ言上有ケレハ「一度天下<sub>②</sub>一等ノ上ニ重テ難<sub>③</sub>被<sub>レ</sub>動<sub>④</sub>干戈」。右衛門ハ高野山へ參ル上ハ、否トハ申間シク、墨付ヲ取テ可遣<sub>⑤</sub>由被<sub>レ</sub>仰出故ニ、右衛門墨付ヲ以テ、城ヲ請取ト云リ。夫故ニ藤堂佐渡守殿、渡部勘兵衛ヲ知行一万石ヲ<sub>②</sub>被<sub>レ</sub>召置<sub>③</sub>ケルト云々々。誠ニ、角有律儀ナル道、武士ノ手本成コト一ツ成共仕出ケルコト、無<sub>レ</sub>智不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>成。智有テモ、武道ヲ嗜スシハ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>出。去ハ、物ハ善惡トモニ手本有コトハ仕ヨク、無<sub>②</sub>手本<sub>③</sub>コトハ難成物也ト云伝侍ル。去ハ、近代ノ手本ト成コト、又百世ト云トモ不可<sub>レ</sub>變武ノ道也。去ハ、此勘工衛コト大坂御陣ノ時、久法寺表藤堂佐渡守殿責口也。城内ノ敵ハ、長曾我部土佐守也。所ハ大和川ノ堤ヲ前ニ、

『功名咄』三(中卷ノ上)

当河原ニ備テ待掛ル所ニ、和泉殿ノ先備一文字ニ備タルガ、三町計前ヨリ半分別テ、左備イラテ懸ニ懸テ、藤堂仁右衛門、同新七、同采女、桑名弥次兵衛杯云、歴々ノ者共大勢討死仕テ、既ニ旗本備迄追討ニ可<sub>レ</sub>成ヲ、勘兵衛横槍ヲ入シニ依テ、追討ニ不<sub>レ</sub>成。以後ニ勘兵衛ト互ニニラミ合テイタル所ニ、左ノ方ヨリ伊井掃部頭殿備ヲ立直レ<sub>③</sub>静也<sub>④</sub>。押太鞍ヲ打テ掛ル勢ヲヒノ見ヘケルニ依テ、軍勢最前ノ戦ニ劣タル上甚恐懼仕ケレバ、長曾我部、戦共不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有利ト思テ引込給フト云リ。然ルニ、和泉守殿ハ勘兵衛ガ横鎧運カリシ故ニ、大勢為討タリト宣フ。勘兵衛ハ吾横鎧ヲ不<sub>レ</sub>入於テハ、和泉守殿旗本マテ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>⑤</sub>追討ニ、横鎧故ニ活給タリト云シ。然ルニ横鎧ト云物ハ、潮相大事也。潮相悪シケレハ役ニ不<sub>レ</sub>立。去ハ、勘兵衛ガ横鎧少シ遅カリシカト覺タリ。其故ハ、先備ヲ討テ三町計追討ニセシ比、敵本ト備テ在シ。河原へ横合ニ懸ケル故、弱者又ハ手負ナラデハ不<sub>レ</sub>居、強兵ハ追行ケル俛、勘兵衛カ手ノ者ハ草履取ニ至迄首ヲ不<sub>レ</sub>執者ハナカリシト云伝侍ル。先へ追行シ者共ハ裏切有ト云シニ依テ引返シケレバ、其内ニ勘兵衛ハ最早引取ケルト云ヘリ。去ハ、早ク討時ハ奇正一ツニ成テ、横鎧ノ役ニ不<sub>レ</sub>立、ヲソキモ又役少ト云ヘリ。能々其潮相ヲハ習覚給へ。免角和泉守殿大坂表ノ働ハ悪カリシカト思ハル。其故ハ仁右衛門、新七以下討死セシ場ト、旗本備ノ所迄ハ間上方道一里計有シトカヤ。夫故ニ勘兵衛モ思様ニ不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>勵ト云リ。最可<sub>レ</sub>有<sub>①</sub>左コト也。旗本迄追討ニセラレサルコトハ、勘兵衛カ功ト可<sub>レ</sub>謂者歎。此旨能々思量仕給へ。

①故↓段(大・金)。②ヲトテ(大・金)。③レ↓シ(大・金)。④也。↓ニ(大・金)。

一 大坂御陣ノ時、井伊掃部頭殿責口ハ、藤堂和泉守殿ノ右ノ方也。城方ハ木村長門守、後藤又兵衛カト覺タリ。掃部頭殿家頼庵原内匠兩度ノ合戦ニ、兩度共ニ一番鎧ヲ合、大将木村長州ノ首ヲ執タ

リト云リ。又掃部頭殿先備ニ一町計敵ニ被<sub>レ</sub>追立タルコト有。然ルニ旧ハ甲州侍廣瀬江右衛門ト云シ者、其比ハ左馬助ト云テ、一人此時迄生残テ在シカ、掃部頭殿奉行ニテ、自身旗ノ手ヲ取テ逃ル軍勢ヲ押分<sub>レ</sub>三町計進テ討死ス。故ニ諸方ヨリ被<sub>レ</sub>追立タルヤウニ不覚、世上ニ被<sub>レ</sub>追立タルト不謂也。又野本右近ハ御宿越前ヲ討取シト也。扱、掃部頭殿軍勢ヲ休メ、手負ヲ助テ居給フ所ニ、其名字ハ不覚、御使番衆五ノ字ノ指物ニテ乘来リ、馬上ニテ云ヤウ、「掃部頭殿、藤堂和泉カ午<sup>①</sup>敗軍仕待ル、御助力アレ」ト云。掃部頭殿ハ曲録ニ座シテ不<sub>レ</sub>開体ニテ居給フ。良有テ彼御使番衆又來テ謂ヤウ、「唯今和泉ハ可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>討死<sub>レ</sub>カ、見殺給フカ」ト云。其時、掃部頭殿宣フ様、「先程ヨリ何者ナレバ、無作法ニ馬上ニテ、其上眼モ不<sub>レ</sub>見<sup>②</sup>。是程軍ニ戰勞手負モ多シ。吾ナラデ余ニ軍勢ハ無力」ト宣フ。御使番衆、「如何ニモ仰ハ最ナレトモ、味方ヲ一人見殺給フヘキニ非ス」ト云捨テ去ヌ。其時、掃部頭殿家頼岡本半助ニ談シテ備ヲ立直シ、螺大鞍ヲ鳴シテ掛行勢<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>見ケレハ、長曾我部軍勢最前戰テ勞タル上ニ、赤備ノ大勢靜ニ押太鞍ヲ打テ掛ケルヲ見テ、軍勢皆色ヲ變ズ。故ニ長曾我部、戰モ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有利ト思量仕テ、軍ヲ引入ケルト云リ。扱、大坂落城以後、長曾我部<sup>④</sup>ト成テ京都へ出給ヒケルニ、諸大名群集ノ中ニテ或人相尋ケルハ「大坂表ノ働、貴殿勝軍ト見ヘツルニ、早々引取給フコト、渡部勘兵衛ニヤ仕負給フヤ、無<sub>レ</sub>覺束<sub>レ</sub>」ト問。長曾我部ガ曰、「イヤ々勘兵衛ツレバ蟻ノセ、ル程ニモ不<sub>レ</sub>存。何トソ和泉ガ來レカシ一軍ニ勝負ヲ決スベシ」ト相待ケレトモ、近辺ニモ不<sub>レ</sub>見。角有所ニ、左ノ方ヨリ誰トハ不<sub>レ</sub>知赤備ノ軍勢靜ニ大<sup>③</sup>鞍ヲ鳴シテ押來ケレバ、初度ノ軍ニ勞タル軍勢、是ニ氣ヲ被<sub>レ</sub>奪皆色ヲ變シケル故ニ、戰モ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有利ト思量仕テ、扱軍ヲ引入侍ルト被<sub>レ</sub>云ケレバ、掃部頭殿微笑シテ、「其赤備ハ身共ニテ侍リシ」ト宣ヒケルト云々。誠ニ、庵原内匠、兩度ノ戰ニ兩度ナガラ一番鎧ヲ入初メ、其上大將ノ首ヲ取シコト、冥加ノ武士ト云ヘシ。無<sub>レ</sub>冥加<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>成。然ト

モ又冥加計テモ成間敷。其心ニ少モ無<sub>レ</sub>油断<sup>カサ</sup>持ツランモノカ。去ハ、甲州葦崎合戦ノトキ、一日ニ四度ノ合戦有シニ、何モ旗本備ヲ以テ二ノ勝ヲ仕給ヒケルニ、小幡山城ト云フ者、旗本組ニテ三度一番鎧ヲ入初メ、四度目ノ合戦ニハ敵ノ備へ乗込組討ニ仕テ、再拝掛タル武者ヲ討取シト云リ。此評判ニ曰、「大体ノ者ナラバ、一番鎧ヲ合タラバ、二度目ニハ其心早少シハ怠リモ有ヘシ。又ハ身ヲ大事ニ思テ<sup>ひかゆる</sup>抑ル心モ可有。一円無<sub>レ</sub>其心。四度ノ合戦ニ三度鎧ヲ合、四度目ニハ組討ノ高名ヲセシコト、真実ノ武士、無<sub>レ</sub>比類<sub>レ</sub>者也」ト云ヘリ。此旨最至極セリ。誠ニ、此山城ニモ不<sub>レ</sub>劣武士ト云ヘキ者歟。又旗本奉行廣瀬左馬助ガコト、老功ノ武士ナルコト此時弥顯ル。屍ノ上ニ名ヲ拳、栄花ヲ子孫ニ残ストハ、此等ノコトヲヤ可<sub>レ</sub>申。岡本半助カ術、最珠<sup>④</sup>勝ト云ヘシ。時ニ取テノ高名也。去ハ、軍ニハ第一勢ヲ取コト秘術也ト伝受スル者也。野本右近カコトハ最前書驗ケル故ニ略<sub>レ</sub>之者也。京都ニテ長曾我部殿物語ニ依テ、掃部頭殿ノ面目、大將ノ譽、此上ニ何カ有ランヤ。

①午↓手(大・金)。②「見」の右下に「ヤ」(金)。③大↓太(大)。④珠↓数(大・金)。

一 最前モ書付侍ル稲繼志岐、関ヶ原合戦ノ時分ハ其名ヲ半兵衛ト云テ、知行百五十石取シガ、其後次第ニ立身シテ立花家ノ家老ト成、知行三千石給ヒテ立花志岐ト云シトカヤ。然ルニ、寛永ノ初、立花殿毎<sub>レ</sub>物金銀ヲ如<sub>レ</sub>畜<sup>ツツ</sup>給<sub>レ</sub>御仕置仕給フニ依テ、家中并領内ノ人民困窮ス。故ニ、家老ノ面々、時々奉諫言共不用入給。角有所ニ立花志岐引籠テ、身ノ暇ヲ申上ル。立花殿、「如何被<sub>レ</sub>思召<sub>レ</sub>ケン、二千石ノ御加増ヲ可<sub>レ</sub>給」由ニテ被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御留<sub>レ</sub>ケレハ、其時志岐登城シテ云ヤウ、「是ハ及古<sup>ホシ</sup>ニテ侍レトモ被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>御覽<sub>レ</sub>侍レ」ト云テ、以前二方々ヨリ來ケル書状ヲ六七ツ取出テ掛御目。其書状、「五千石、七千石、一万石、一万五千石ナト、三万石迄ハ可<sub>レ</sub>給間、何トソ我等家ニ來給ヘ」ト云文章也。ケ様ニ侍レバ、知行所

望ニ侍ラハ、疾何方ヘモ可レ參ナレトモ、一円知行ハ所望ニ不レ侍、唯可レ御暇給」由申上ル。其時立花殿、「夫ハ如何様ノ儀ニテ左様ニハ申侍ル」ト也。其時壹岐十三ヶ條書付ヲ以テ諫言ス。「此段無レ御聞入、兎角御暇ヲ可レ給」由申上ル。立花殿聞入給ヒシニ依テ留リス。其後、嶋原陣ニテ世倅兩人ヲ宜執飼テ、城内ヨリ夜討ノ時、鉄炮ニ当テ其手疵ニテ終ニ死レト也。其子則家ヲ継テ、于今立花家ノ家老ニテ在シ。併一方ノ家老ト諍レ威勢、家中ノ様子悪シト云々。

誠ニ、此壹岐ハ文武ニ道ノ武士ト可レ謂者歟。知行百五十石ヨリ、三千石迄仕上ケルニ、方々ヨリ猶高知ニテ被レ召ケレトモ不レ參。然レトモ、其主君ノ過ヲ諫シ為ニハ、御暇申上ル所、義有ノ道也。然レトモ、其身ニ德ナクンバ不レ可レ聞入。左有バ徳有ンコト勿論也。子共兩人ヲモ時節有テ取飼シコトハ、其身ノ果報也。子共ニモ器量有テ、武ノ用ニ立シヲ見置テ死センハ、武ノ冥加也。此段ハ誰モ可レ羨者也。臨レ節奉レ諫言コトハ、臣ノ法也ト云ヘトモ、大身ニ成テハ其身ヲ大事ニ思テ不レ諫、又ハ世上ヘノ為レ名聞計ニ、諫ル族多シ。是ラハ誠ノ忠臣ニ非ス。此壹岐ガ如ク、真実ヲ以テ諫ルコソ忠貞トハ可謂者也。然ルニ、壹岐ガ子其職ヲ継テ其家ニ在ナガラ、相手ノ家老ト諍レ威勢コト愚也。世中ノ忠臣二代不レ統トハ是ラノコトヲヤ可レ申。去バ、「君臣ハ船ト水トノ如シ」ト云テ、君ヲ船ニ譬、臣ヲハ水ニ譬タリ。其故ハ、水能浮レ船、水ヨク船ヲ覆スト云リ。然ハ、壹岐一代ハ水也。今ノ子供ハ波也。若此上ニ威風増時ハ、君ノ危カラシコト必セリ。喩ハ、我其職ニ在テ彼者ノ如ク一方ノ家老ト諍レ威勢コト有ハ、此方ヨリ以レ使如レ此威ヲ諍如ク成行コト、主君ノ御為ニ不レ可レ然。互ニ誓紙ヲ以テ向後毎レ物道理次第ニ可レ仕。夫ニテモ双方ノ方人共尚諍レ威コト不レ止、鬪ヲ取テ、兩人ニ一人御家ヲ去ヌヘシ。如此成行テハ、主君ノ御為不レ可レ然ト云遣シ可レ為レ和談者也。相手ノ家老不レ同レ諍レ威時ハ、吾方ヘ可レ為レ与力者共ニ、吾ガ暇ヲ乞御家ヲ去トモ、貴

殿達ハ御家ヲ不レ立去、永ク御奉公アラレ侍レ、頼入侍ル。如此諍レ威テハ主君ノ御為不レ宜ト云テ、主君ヘモ如レ此、吾々諍レ威テハ御為不レ可レ然故、身暇ヲ申上ル者也ト、謂度者也。覚謂ハ、相手ノ何某モ不レ同レ之ト云コト不レ可レ有。若又和順セスト云トモ、謂出タル方ノ勝也。相役以テ同シ道理也。此旨一々了得仕給へ。

①レレ↓シ（金）。

一 元和ノ比、加藤左馬介殿在江戸ノ時分、或時近隣火事ニテ、既ニ左馬介殿ヘモ可レ遷レ火体也シニ、掃除坊主宗茶ト云者、書院ノ障子ヲ脱シケルヲ、左馬介殿立ナガラ御覽シテ、「ウロタヘ者、何ヲスルゾ」ト宣ヒケレバ、宗茶云ヤウ、「殿ウロタヘ者トハ無レ御情」、障子ノ一間成共取出タランニハ御為ニハ成マイカ。ウロタヘタルトハ無レ御情」ト立腹シテ断ル。左馬介殿、「最々為レ免々々」ト云テ立去給シガ、一両月ヲヘテ髪ヲ為レ立侍ニ被レ仰付ケルト云々。誠ニ此宗茶、此騒動ニモ不レ動レ心、善ク断ケル者哉。去ハ、譬主人タリト云トモ、道理有コトヲ云時ハ不レ隨、其道理ト云コトナシ。實ニ可断ヲ断ルコトトモ、無其智成ヘカラス。去ハトヨ、戰場ニ於テ、如此慥ニ断ル、則後ノ証拠人ニモ成モノ也ト云ヘリ。惣別間敷所ニテハ、人ノ耳ニ当ルヘク云者也ト云伝侍ル。喩ハ、何某殿日比ノ口程モナシ、眼ヲハツキト明給へ。油断メサレナト、①云時ハ、何ヲ其方眼ヲ明テ動候ヘト云ガ如ク怒リ思フ故ニ、能覺ル者也。常体ノ如ク柔ニ云時ハ、間敷節ハ不レ覺者也ト云ヘリ。又左馬介殿皮掃除坊主ヲ此一言ヲ以テ取立給フコト、最名將ト可レ謂者歟。實ニ間敷時分、角有一言ハ不出者也。物ニ不レ動男ト可レ謂者歟。此旨能々思量仕給へ。

①ナト、↓、ト（大・金）。

一 元和八年壬戌歳、本多上野介殿左迁仕給フ。世上ニハ「謀叛也ト云ヘトモ言也」ト云伝タリ。其証拠ニハ上野介殿左迁以後、大

名衆ニ身代果タルトシト云リ。其前廉最上源五郎殿不行義ニ依テ、身代御果シニテ、最上為「仕置」宇都宮ヨリ六百余騎ニテ被參ケルカ、仕置仕舞給テ帰城仕給ヒケル節、最上ヲハ上杉景勝請取ヌ。又佐竹修理大夫義信、途中ニ出向テ、「御答ノ品ヲバ不存。私ニ御預也」ト申テ、上野介殿ハ直ニ窪田エ、子息出羽守殿ハ直ニ米沢エ配流仕給フ。扱、家中ノ面々ヲバ道々ニ新関ヲ居置、五拾百ツ、所々ニ押留テ、宇都宮ニ不歸也。扱又宇都宮ノ城ニハ、長谷川内膳ト云家老ト太田長兵衛ト云者、其外侍分ノ者百計留守居仕テ、在家老ト長兵衛評定仕テ、家中ノ妻子ヲ城内ヘ取入、「兎角上野介殿墨付於不來、城ヲ不可渡」ト議定シテ在シニ、百計ノ侍四十計落散シテ、六拾余殘居テ城ヲ枕ト仕テ可為「討死」覚悟也。角有所ニ上野介殿ヨリ、「城相渡シ候ヘ。其方達志シハ悦着ナレトモ、我身コトハ年老テ兎モ角モ也。然トモ出羽守為不可然。於我身少モ答ノ覚ナシ。然ラバ可為「讒言」。左有時ハナトカ終ニハ思召直サ、ラント思所也。故ニ城相渡候ヘト也。此故ニ、「此上ハ兎角ヲ可謂ニ非ス」ト云テ、城ヲ可相渡成ヌ。彼六百余騎ノ留守ノ妻子共ヲモ縁在所ヘ夫々ニ送り遣ヌ。六拾余殘シ、侍共ヲ家老ト長兵衛ト下知シテ、城ヲ相渡シヌト云ヘリ。彼城ニ籠シ侍共落散セシ者共ノ名字書付于今有之ト云リ。恥敷コト共也。扱、上野介殿與方ハ酒井雅楽頭與息女タルニ依テ、與方一生ノ内ハ江戸屋敷ニ家中ノ面々迄其俣為「置給ヒケルト也。又此長兵衛ト云者ハ、元來上野介殿別腹ノ息女ヲ給テ聲也。然ルニ、上野介殿ヨリ出羽守殿ハ疾果給ヒタリ。扱、上野介殿一尺一寸有大幅ノ粟田口吉光ノ脇指、中堂來光兼ノ脇指ニ腰ヲ、此長兵衛ニ渡シ給テ宣ヒケルハ、「我子孫本多ノ名字ヲ繼テ御旗本ヘ出ル者在ハ、此吉光ヲ為執、中堂來光兼ヲバ其方ガ子孫ニ為執ヨ」ト也。長兵衛畏テ請取置ヌ。其後四十余年ヲヘテ後、本多出羽守殿奥州ニテ召仕ノ女ニ出來ケル男子一人在ケルカ、国広ク成テ江戸ヘ出テ徘徊仕ケルガ、其コトハ何其不云シテ在ケレトモ、子共ニハ兼々謂聞

セ置シニ、不思儀ニ得時被召出、本多忠左衛門ト名乗テ二千俵ノ御合力米ヲ拜領仕タリ。彼長兵衛其此<sup>①</sup>ハ法体シテ太田三白ト云テ在シガ、不斜悅テ、「唯今迄不渡コトハ貴殿浪人ニテ不如意ノ俣、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>コトヲ思フカ故也。以後ハ定テ先祖ヨリノ重宝ナレハ余モ放シ給ハシ」ト云テ、一尺一寸在ケル大幅ノ吉光ヲ渡シヌトカヤ。中堂來ハ最我子ニ為執ケルト云リ。又三白ノ内室末期ニ及テ、彼忠左衛門ヲ招テ、「其方コト本多家ヲ繼テ在ナカテ、請<sub>②</sub>道具ナクテハ成間敷。是ハ上野介様給ヒシ」ト云テ、黄金五枚・三枚ノ道具ヲ三色迄被遣シト也。我子ニハ不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>執<sub>レ</sub>甥<sub>③</sub>ニ被<sub>レ</sub>渡ケルコト、女性ニハ殊勝ナル心底也ト云々。

誠ニ此三白、主ノ遺言ヲ不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>四拾余年ヲヘテ以後被<sub>レ</sub>伝ケルコト、律儀第一ト云ベシ。義有信有忠有ト云ベシ。宇都宮ヲ持シコト、武勇ノ道ニ<sup>③</sup>達シ、又角有義理ニモ達セシコト、珍敷男ト可<sub>レ</sub>云者也。去ハ、四十余年以前ニ聞シ主君ノ一言ヲ不<sub>レ</sub>違、価不<sub>レ</sub>知程ナル道具也。最此三白ナラテハ此遺言ヲ聞覺タル人モナキニ被<sub>レ</sub>渡コト、兎角ヲ可云ニ非ズ。無慾ナルコトハ学テモ難<sub>レ</sub>学、悟テモ難<sub>レ</sub>悟此一事也。誰カ此道ヲ修スルヤ。然トモ、可<sub>レ</sub>執<sub>レ</sub>物ヲ不<sub>レ</sub>執云ニハ非ス。己ヲ儉約ニ慎テ執問敷物ヲハ露程モ不<sub>レ</sub>執ト云コト也。世上ノ人並テ己ガ物ヲ徒ニ仕費シ、世ヲ貪ル族多シ。己ヲ儉ニスルニハ答ナク、己カ物也ト云トモ、徒ニ仕費ハ先以天道ニ背道理有。此所ヲ能<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>得仕給ヘ。又三白ノ内室上野介殿息女也ト云ナガラ、家頼ニ嫁スレバ家頼也。能道具ヲ我子共ニハ不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>執<sub>レ</sub>本多ノ家ヲ思テ被<sub>レ</sub>渡コト賢女也。誰々モ如此仕度物也。去ハ、己ヲ尽スヲ忠トハ云ト也。此旨能々思量仕給ヘ。

①此↓比(大・金) ②請↓諸(金) ③ニ↓モ(大・金)

一 関ヶ原合戦ノ刻、勢州穴ノ津の城ニハ留田信濃守殿、分部左京進殿籠城仕給フ。然ルニ、江州甲賀侍伴ノ三左衛門、同舍弟十郎兵衛モ出曲輪一ツ預リテ在シニ、西国方ノ軍勢美濃路ヨリ千草越ヲ

押寄責ケルニ、双方鉄炮ニテ打合、出曲輪ノ土居ヲ登ル所ヲ烈ク鉄炮ニテ打払。其時、矢狭間ヨリ突出シケル鎧ヲ、寄手ノ兵一人執テ引合ケルヲ、三左衛門ヲ見テ、唯一鎧ニ突落シケル。寄手シラミテ不<sub>レ</sub>得乘。然ル所ニ、軍使来テ云ヤウ、「城内ハ少勢也。寄手ハ猛勢ナレハ、出曲輪ヲ捨テ引取給コト也。故ニ伴兄弟殿シテ城内へ引取。出曲輪ヨリ城迄、寄手伴兄弟カ十四・五間跡ヨリ押詰<sub>②</sub>ケルニ、町中ニテ彼兄弟十二・三度鎧ヲ杖ニ突踏留ケルニ、敵モ流石押掛リ勝負ヲ決スルコト不<sub>レ</sub>成。押留リケル伴兄弟ガ引ハ押寄ケルト也。扱、追手ノ門ニテ惣勢ハ門ヲ入仕<sub>③</sub>兄弟并家頼五・六人残ケル時、門ノ扉ヲ指塞ヌ。伴兄弟ハ南無三宝、創<sub>④</sub>ニカハレタルコト思ヒケル処ニ、櫓・堀・矢狭間ヨリ烈ク鉄炮ヲ打出ス。此時寄手ノ鉄砲、伴カ小姓ニ当テ倒タリ。引起シテ見レハ、甲ノ吹返ニ当テ、其身ニハ無<sub>レ</sub>恙ト云ヘリ。寄手モ是ニ辨易シテ、少シ責口ヲ引退ク時ニ、小門ヲ開テ伴兄弟并家頼ヲハ入タリ。分部左京殿ハ折節痛氣ニテ立居不如意ニテ、小姓ノ肩押ヘテ下知仕給ヌルカ、殊更様子見コトニ見ケルト云リ。如右伴兄弟ヲ捨テ門ヲ被指ケルハ、敵ニ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>附入<sub>⑤</sub>間敷トノ用心也ト云リ。扱又寄手ニハ関東勢近国へ責登タル由注進有ケルニ依テ、津ノ城ヲハ責捨、早々関ヶ原表テへ引返ケルト云リ。扱出曲輪ニテ三左衛門ニ被<sub>レ</sub>突落<sub>⑥</sub>兵、真唯中ヲ被<sub>レ</sub>突通<sub>⑦</sub>ケレ共、味方助テ帰リ、終ニハ本復シテイタリケルカ、「吾ヲ突落タル兵ハ具足ノ胸板ニ堅木瓜ヲ付タル紋有ケルト覚タリ」ト云ケルカ、三左衛門ガ具足ニ有ケルト云々。誠ニ、此伴兄弟カ剛強第一ト云ベシ。去ハ、舍弟十郎兵衛老後ニ一類ノ何某ニ語ケルハ、「出曲輪ヨリ追手口迄ノ間十三度迄踏留ケレトモ、敵モ押懸テ討取コト不<sub>レ</sub>叶シテ、寄手モ踏留ケル間、思切タル勇士ヲバ能難討者也ト覚タリ。此旨能々思量仕給へ」ト教ケルト也。実ニ数万騎ノ敵ノ中ニ吾一人ヲ云トモ、一命ヨリ外別ニ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>執物ナシ。又思切タル敵一人ヲ欲<sub>レ</sub>討、吾モ一命ヲ不<sub>レ</sub>捨難<sub>レ</sub>討者歎。此段ヲ了得セバ、如何大勢ニ臆センヤ。如何一人ヲ

『功名咄』三（中巻ノ上）

可<sub>レ</sub>媿<sub>①</sub>ヤ。又出曲輪ニテ三左衛門ニ鎧ニテ被<sub>レ</sub>突落<sub>②</sub>タル兵、堅木瓜ノ紋ノ有ケルヲ覚ケルコト、不<sub>レ</sub>動<sub>③</sub>心男、善武士ト可<sub>レ</sub>謂者也。死生ノ境ニ臨テ不<sub>レ</sub>動<sub>④</sub>心事、是ノ<sub>⑤</sub>離死生タルトハ可<sub>レ</sub>謂者也。分部殿、立居不如意也ト云トモ、被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>下知<sub>⑥</sub>ケルコト、武ノ本意也。此旨一々思量仕給へ。

①コトトト（大・金）。②詰めるの意に本書は「詰」（つづる）を使うことが多い。③仕↓伴（大・金）。④創ニカハレタルコト↓飼ニカハレタルヨ（金はカ）ト（大・金）。⑤「ノ」の字なし（金）。

一 右ノ時分、津ノ城ニテ紫母衣ノ武者、城内へ一騎馳入テ討死仕タリ。此者ハ安芸ノ毛利秀元ノ家頼也。然ルニ、秀元ノ家中ニテ紫母衣ト云ハ、軍陣ノ使番掛ル処也。故ニ、此役ヲバ数度武功ノ者共ナラテハ不被<sub>レ</sub>仰付。然所ニ、若キ者一人被<sub>レ</sub>仰付タリケレバ、前々ヨリ武功ノ者共、「今度被<sub>レ</sub>仰付タル者ハ一円ニ武功無之間、我々中間へ入申コト迷惑ナル」由詔仕タリ。其時秀元宣ヒケル、「當時不<sub>レ</sub>有<sub>①</sub>戰國」、若キ者ニ可<sub>レ</sub>有<sub>②</sub>武功<sub>③</sub>様ナシ。若有<sub>④</sub>戰無<sub>⑤</sub>武功<sub>⑥</sub>可<sub>レ</sub>任<sub>⑦</sub>其意<sub>⑧</sub>由也。故ニ老功ノ者共兎角ヲ不<sub>レ</sub>謂ト也。依<sub>⑨</sub>之、彼若キ者モ含<sub>⑩</sub>其意<sub>⑪</sub>津ノ城エ一番乗込、討死ヲ仕タリト云ヘリ。然ルニ、世靜以後、数年ヲヘテ於津城紫母衣ヲ討取タルト云者、世上二三・四人有テ、何ヲ何トモ難<sub>⑫</sub>弁。依<sub>⑬</sub>之或者、伴十郎兵衛ニ此コトヲ問ケレバ、十郎兵衛ガ云ク、「実ハ上田吉之丞ガ討取タリ。然レトモ、其時分吉之丞ニハ不似合ト云テ不<sub>レ</sub>譽<sub>⑭</sub>ト也。其故ハ、津ノ本城台所ノ前ニテ討取タリト也。去ハ、此上田吉之丞ハ数度武功有者也ト云トモ、馬上手ナルニ依テ、世上ニ馬乗ノ名ヲ高ク呼テ武功ノ名ヲ不<sub>レ</sub>知ト云々。誠ニ如<sub>⑮</sub>右若クシテ無<sub>⑯</sub>武功者、角有大役ヲ被<sub>レ</sub>仰付タルコト、誠以有面目儀也。然トモ、一概ニ討死スルコトハ非本意。願ハ敵將ヲ組討ニスル如キハ不<sub>レ</sub>達。其志ト云トモ、最ト云ヘシ。次ニハ名有敵ヲ掛目、討死ト思ヒ定テ討テ掛ル時、勝負ハ天運ナレバ、不及是

非ニト云ヘシ。是ハ一向討死ト窮タルハ、不足志ト云ヘシ。併是者モ如<sub>レ</sub>右志ニテ馳入ケルカ。善敵ニ不逢シテ被<sub>レ</sub>討ケルカ、無<sub>レ</sub>覺東<sub>一</sub>。又、吉之丞カ台所口ニテ討取ケルコト、惣勢追手口・町口ニテ防戦ケルニ、場所不審也。今思案スルニ、敵乗込ケルヲミテ、吉之丞モ統テ追付討取ケルカ。是トテモ善ニハ非ス。若味方備ヲ乗抜ル敵有ハ、後陣ニ讓テ不如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>構。此故ニ、吉之丞カ働ヲ世上ニ不<sub>レ</sub>褒コト勿論也。去ハ、無功ノ武士ハ取籠者ナド有<sub>レ</sub>時、可有<sub>レ</sub>利トテ裏道エハ不<sub>レ</sub>掛者也。其故ハ、自然表ヨリ直ニ懸者ニ有利時ハ、其虎口ヲ脱タルヤウニ成者也ト云リ。是モ閑ケ原合戦ノ刻、浅野左京大夫殿瑞龍寺ノツブラ乗取給ヒシ時、辻小作ト云者山ノ尾崎ヘ廻テ懸リケルニ、思ノ外敵責口ニ於テ被<sub>レ</sub>討亡<sub>レ</sub>ケレバ、不<sub>レ</sub>逢<sub>レ</sub>手ト也。是モ小作常々武功ノ者ナル故ニ、人不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>嘲弄ト云リ。次ニ、吉之丞武功ヲ世ニ不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>沙汰。昔ヨリ如此閑東ニテ、松本備前・塚原ト伝ナト云者、数度場数有モノトモナレトモ、劍術ノ名人タルニ依テ、兵法遣トハ世上ニ知テ武功ヲ被<sub>レ</sub>知人ナシ。近来、藤室和泉守殿家来、内海六郎左衛門モ武功ヲバ世上ニ不<sub>レ</sub>知。鉤鏹<sub>カケ</sub>上手成ニ依テ鉤鏹遣ノ名高シ。上田吉之丞モ同<sub>レ</sub>之。歌・連歌・亂舞・鞠・算其外、幽玄ノ芸ニ名ヲトランヨリハ、武門ノ家ニ生テハ一ツ成共武芸ニ達シタランニハ、忠孝ヲ励ス便トモ可<sub>レ</sub>成者也。此旨思量仕給へ。

一 寛文ノ比、丹羽左京大夫殿家老ニ樋ノ新右衛門ト云者アリ。同傍輩ニ目付役ニテ、酒匂忠右衛門ト云者アリ。然ルニ、御親父五郎左衛門殿、年忌ニテ法事執行有ケルニ、彼忠右衛門前日ヨリ書物等ヲ焼捨、新右衛門ガ仏前ニテ拝礼仕ケル所ヲ、大脇指ヲ以テ抜打ニ首ト思テ打ケルカ、高ク当テ頭ニ斬付タリ。然トモ、不<sub>レ</sub>斬ノ頭ヲ疊エ打付タリ。忠左衛門不<sub>レ</sub>斬ト見テ執直シ、新右衛門ガ肩先ヨリ脇ノ下ヘ突抜タリ。其時、新右衛門少モ不<sub>レ</sub>驕、左ノ手ニテ忠右衛門ヲ引寄、大脇指ヲ抜テ忠右衛門カ胸板ヲ突抜タリ。忠右衛

門、即時ニ死ス。時ニ大勢立驕、新右衛門ヲハ引掛庭迄出ケルニ、新右衛門カ云ク「吾一円ニ意趣ノ覺ナシ」ト云終ルト、即時ニ絶入ヌト云。

誠角有逢<sub>レ</sub>災難タル時、如<sub>レ</sub>此首尾ヲ合死スルコト、武ノ冥加也。新右衛門頭ヲ疊ヘ当ル程ニ不<sub>レ</sub>斬トハ云ナカラ被<sub>レ</sub>斬付、其上ニ肩先ヨリ脇ノ下エ被<sub>レ</sub>突通ナガラ、相手ノ忠右衛門ヲ引寄指通ケルコト、能出合タル者哉。去バ、大脇指ニテ突コトヲ不<sub>レ</sub>忘、最小脇指ニテモ一概ニ突ト計心得ナンハ不<sub>レ</sub>覺タルベシ。常々自由ナル様ニ可習覺有也。新右衛門末期ニ「吾一円ニ意趣ヲ不<sub>レ</sub>覺」ト云シモ、被<sub>レ</sub>謂間敷所ニテ能云タル者哉。相手ノ忠右衛門ハ前日ヨリ書物等ヲ焼捨、可<sub>レ</sub>打果覺悟ナレバ、我意ニハ定テ意恨コソ有ナレトモ、無書置時ハ氣違ト云ヨリ外可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>沙汰様ナシ。次ニ、亡君ノ仏前ニテ角有法事ノ時分、如<sub>レ</sub>此儀ヲ仕出ケルコト、先以不<sub>レ</sub>忠不<sub>レ</sub>義ト可云者也。然トハ云トモ、脇指ノ不<sub>レ</sub>斬ヲミテ突ケルコトハ能仕タル者也。故達<sub>レ</sub>其意恨<sub>レ</sub>タル者也。此旨能々思量仕給へ。

一 寛永ノ比、永井信濃守殿家頼ニ高松六弥ト云者アリ。此者未若キ時分、其時ノ主人ハ不<sub>レ</sub>覺、武州江戸ニテ雨降以後漸大道ノ泥土ヲ一筋踏分、其外ハ泥土也シニ、六弥若キ者ノ氣先強キ男ニテ、我ハ一円不<sub>レ</sub>除人計泥土ノ方ヘ除サセテ通ケルニ、又先ヨリ町与力ニ其名字ハ不<sub>レ</sub>覺、弥五左衛門ト云者、是モ其比沙汰仕タル荒者也ケルガ来リケルニ、六弥思ヤウ、「我無分別ニテ唯今迄人ニ計除サセテ通りケルコトヨ。今又彼弥五左衛門ニ逢テ泥土ノ中ヘ除ナバ、定テ町人共モ嘲弄スヘシ。無面目コトトモ也。無是非爰ニテ所詮討果迄ヨ」ト思定テ行懸ヌ。如案弥五左衛門少シモ不<sub>レ</sub>除、素ノ六弥ハ不<sub>レ</sub>除シテ一ツ二ツ問答セシガ、六弥刀ヲ抜テ切合タリ。互ニ手痛働ケルニ、弥五左衛門運ヤ劣リケン。終ニハ被<sub>レ</sub>切倒。又、六弥モ小鬘先ヨリ片眼カケテ被<sub>レ</sub>切付、其外糟手余多手負タリ。然トモ、六弥刀ヲ鞘ニ納テ三町計立退ケルカ、其時六弥思ヤウ、「是程

二諸人見物ノ前ニテ公礼<sup>ケ</sup>間敷喧嘩ヲ仕テ、留<sup>レ</sup>指シテ退ケルコト無念次第也」ト思テ、其所ヨリ取テ返シ、弥五左衛門倒テ在ケル所ニ至テ留<sup>レ</sup>二刀指。其時所ノ町人、其外見物シケル諸人、一同咄テ感シケルト也。其ヨリ又立退ケルニ、数ヶ所手負テ諸人怪ミケル間、向ヨリ編笠ヲ着シ來ルモノアリ。其時、六弥彼者ノ際ニ立寄、「御仁体ヲ見掛申タリ。此体ニテ侍ル。其編笠ヲ申請度」由所望仕タリケルニ不遣。其時、六弥立腹シテ拳テ把テ真頭ヲ確ト打テ、「侍畜生メ」ト云テ去ト云リ。又其以後、信濃守殿城州淀ニ在城仕給ヒケル節、右ノ六弥力隣家ニ犯科<sup>キカス</sup>ノ輩<sup>ツノ</sup>テ上意ニ可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>「仰付」者アリ。家老ノ者六弥ヲ召寄、「近隣ナレハ可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>其心得」由内證有ケレバ、宿所ニ歸リ着、籠<sup>コ</sup>ヲ着シ間ノ堀ニ階子ヲ指テ、少モ無<sup>レ</sup>油断<sup>テ</sup>「侍居タル所ニ、討手兩人被<sup>レ</sup>「仰付」、門ヨリ押込ケル音仕ケルヤ否ヤ、間ノ堀ヲノリテトビ入、討手兩人ヨリ先ニ彼者ヲ討取タリ。其時討手ノ兩人謂ケルヤウ、「我々兩人ニ被<sup>レ</sup>「仰付」タル上意有<sup>レ</sup>、貴殿兩人ヨリ先ニ討取給フコト、近比ナル仕形、失<sup>レ</sup>面目<sup>ノ</sup>所也。故ニ為<sup>レ</sup>「堪忍」間敷」ト也。其時六弥云ケルヤウ、「去ハ御兩人討手ニ越給フニ、若モ仕漏給フコト有ハ、御為悪敷ト存シ、隣家ナレバ堀ヲ乗越トビ込シ所ニ、彼者討テ掛侍ル間、兎角ヲ不<sup>レ</sup>去討留侍ル。被<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>御免侍レ」ト云。依之信濃守殿ヨリ討手兩人ニ堪忍仕侍レト也。故ニ兩人モ兎角ヲ不<sup>レ</sup>云ト也。六弥ハ信濃守殿ニテ足輕大将仕テ一生成ケルト云々。

「功名咄」三（中巻ノ上）

立退ケルカ立返テ留<sup>レ</sup>指コト、於<sup>レ</sup>勇誰カ並<sup>レ</sup>之者アランヤ。去ハ、留<sup>レ</sup>指コトヨク太儀ナル者ト見タリ。其故ハ、大形留<sup>レ</sup>指シテ立退者多シ。然トモ我思ニハ、敵大勢ハ不知、一人計ノ敵ナラバ、大刀ヲ杖ニ突倒タル敵ヲトビ越ル程間有バ、被指間敷道理ナシ。此所ヲ常々能々分別仕給へ。去ハ、喧嘩ヲ仕テ退ニ昼ハ吭<sup>ケ</sup>ヲ指切タルヨシ。夜ハ吭<sup>ケ</sup>ヲ不指切者也。其故ハ、夜吭<sup>ケ</sup>ヲ指切タル時ハ、寢首ヲ搔タルニ紛ル、者也ト云ヘリ。是古実也。又六弥編笠ヲ所望セシニ、前ノ男不為執コト無愛心也。故ニ、頼<sup>ヲ</sup>被打テ失<sup>レ</sup>面目<sup>ノ</sup>者也。又上意者ノ事、心懸能男ト見タリ。以後ノ云分最ヨシ。譬無左ト云トモ、人ノ堪忍スル様ニ謂コト最也。誠ニ道理ヨク聞エ侍ル。兎角物每手本ト云者ナケレハ不成。去ハ、手本ノ文章ヲ定テ習ト云トモ、状ヲ書ニ至テハ、其時々ノ用所次第ニ文章ヲ綴テ、如書一概ニハ難定。此旨思量仕御座在。

①ルビのキンカハ↓ボシクワ（金）。②矢↓失（金）。

一 天正ノ比、関東ニ蝮川山城守殿ト申セシハ所領六・七万石ノ大名也。其比戦国ニテ、弓矢ノ達人ト被云給ヒシ。去ハ、越後ノ謙信ト対談ノ節モ、山城守殿宣ヒケルハ、「越後ノ御人数三備ト我一備ヲ以テ三度戦ヒ侍ルトモ、我ヲノ者共ハ余モ旁侍ジ」ト宣ヒシニ、謙信其故ヲ御尋有テ、「最左コソ侍ラン。日比能被勤侍ル物哉」ト賞美仕給ヒシトカヤ。去ハ、山城守殿常々ノ様子・作法ヲ聞ニ、常々家頼ノ侍共仕出仕ノ時分ハ、数代坐席定テ其坐ニ着。扱、山城守殿出席有テ一礼ヲ申上ル。其後、家中ニ五・六人モ鎧兵法ノ師ヲ仕ル者有シニ、家老共ニ向テ、「今日ハ誰カ弟子共ノ兵法ヲ見物仕給フベキ」ト御相談有テ、替々御見物ニテ相弟子仕合ヲ見給フニ、「仕合ニ勝シ者ヲ褒美シ、仕負タル者ヲハ何モ不<sup>レ</sup>云。又、二度モ負タル者ヲバ先日負給ヒシ。又、負給コト恥シキトハ思ヒ不給ヤ無情也。向後情ヲ被出侍レ」ト宣シ間、昼夜鎧兵法ニ精ヲ入、老若共ニ余ノ慰ト云コトナカリシ。然トモ、他流ノ者トハ仕合ハ

不被<sup>レ</sup>仰付<sup>ト</sup>云リ。又或時ハ、広野ニ出給ヒテ、山城守殿父子五町ヲ隔テ陣ヲ張、見物ニテ家中ノ面々馬ヲ所持仕ル若キ者、又年老ハ惣領分ノ子、面々ノ馬ニ乗テ馬ヲ入ル。又家中ノ二番目、三番目ノ子共ハ歩立ニテ長サ一間余ノ竹ヲ以テ備ヲ立、集イテ彼馬ヲ入ル者ヲ扣落ス。扣落タランニハ馬ヲ二番目、三番目ノ方へ留置ヌ。扱被執タル者ハ、料足一貫文ノ札錢ヲ以テ彼馬ヲ請ル作法也。故ニ家中ノ面々、鎧兵法・弓馬ノ道昼夜無怠。此故ニ、他国ノ軍勢新手三備ト味方ノ軍勢一備ニテ、三度戦テモ味方ノ無勞ト云々。

誠以、武ノ達人ト被云給ヒシモ最ト思ヒ侍ル。去ハ、一孤ノ武士モ常々如<sup>レ</sup>此心懸テ不動<sup>①</sup>。万一兵事有時、可勞勿論也。常々鎧兵法ノ稽古スル時ハ、第一無勞事、其上勝負ノ心ヲ鍛鍊スレバ可<sup>レ</sup>負道理ナシ。去ハ兵法曰、「勝兵ハ先勝テ而後戦、負兵ハ先戦而後求<sup>レ</sup>勝」ト云リ。爰ヲ以テ勝負ノ道理ヲ能々思量仕給へ。

①動↓勤(大・金)。

一 関ヶ原合戦ノ最初 権現様武州江戸御出陣ノ時分、御前へ蜷川山城守殿出給ケルニ 上意有ケルハ、「流石山城モ小田原ニテハ狭間ヲク、リケル」ト被成 御意ケルニ、山城守殿承リ、「小田原ニテハ御前ニコソ狭間ヲハ御ク、リ被成タルト存侍ル」ト申上ル。権現様、「否也。其方コソ狭間ヲハク、リツレ」ト 御意也。山城守、「御意トモ不覚侍。 御前コソ御ク、リ被成タル様ニ存侍ル」ト、五ニ真顔ニ成テ諍給フ間、脇ヨリ、「山城守立マセイヤ」ト云トモ不立故ニ、脇ヨリ引立ヌ。夫ヨリ自ラ御前へ不出シテ、不成出陣、窄人ト成給ヒシト云リ。右ノ諍ノ心ハ(蜷川山城守殿モ小田原ニ籠城セシヲ、権現様為招給フニ依テ、城外へ降参セシト云リ。又権現様モ初程ハ小田原ノ氏直ハ権現様ノ聲成ニ依テ、大関様小田原ヲ責給フト相州ニ御下向有ハ、味方ノ内ニシテ謀叛シテ、大関様ヲ可奉討ト小田原へ内通謀略也ケルニ、大関様ニハ智謀勝給ケル故、初ニ権現様へ以レ使相州小田原ノ氏政ニ可<sup>レ</sup>為(三)上洛(二)由申遣)所ニ、振我意不及上洛、當時天下第一等ノ節、如此者ハ為朝

敵ノ間、自身可為東征存念也。其方海道居住仕給フ候、我等ノ先手ヲ頼入侍ルト也。権現様ニハ右ノ謀略ヲ以テ如何ニモ心心得侍ル。私先手ヲ仕侍ルベシト御返答也。故ニ大関様兩國ノ大軍ヲ引率シ、権現様御分国ニ軍勢ヲ入滿テ以後、大関様御意ニハ、「貴殿持分ノ海道城々ヲ此方へ借給へ」ト宣ヒシ故ニ、「否ヤ」ト宣フコト今更不<sup>レ</sup>叶シテ、「御用ニ可<sup>レ</sup>立」由御返答也。故ニ、其城々ノ分量ニ依テ、五百・三百・千・二千宛兩國ノ軍勢ヲ籠置給間、右ノ謀略相違シテ、無<sup>レ</sup>是非ニ大関様へ無<sup>レ</sup>二ノ忌<sup>①</sup>貞ヲ尽シ給フト云リ。山城守殿被申レ<sup>②</sup>ハ此心得也ト云リ。

扱、関ヶ原合戦落去以後、権現様弥威強ク為成給ヒケル候、山城守殿ハ紀州高野山へ引籠、幽ナル体ニテ居給ヒケルニ、寵愛ノ見小性ニ関主税ト云者有。此者其象美麗也。然ルニ或時、山城守殿へ「御暇ヲ給候へ」ト申上ル。其時、山城守殿涙ヲ流テ宣ヒケルハ、「此体ニ成果侍ハ其方サへ見限果テ暇ヲ申コトヨ」ト御恨有ケルニ、主税申上ケルハ、「努々左様ノ儀ニテハ無<sup>レ</sup>御座」侍ル。御窄人ニテ余ニ痛敷侍ル間、私ニ御暇ヲ給候ハ、江戸へ罷下リ奉公罷出、何トソ御世ニ被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>出侍ル様ニ才覚仕テ可<sup>レ</sup>見侍。如此シテ何ヲ何迄ト御窄人被成テ可有御坐コトモ氣ノ毒成儀ニテ侍ル。平更御暇ノ給候へ。江戸へ罷下一才覚仕見申度侍ル。此儀ヨリ外無他事」ト、神ニ懸テ申上ル故ニ、山城守殿モ、「其儀ナラバ於我祝着也。為<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>暇侍ル。江戸へ下テ見ヨ」ト也。主税悦テ江戸ニ下リ、酒井雅楽頭殿へ見小性ニ在付ヌ。其象美麗ニシテ利根・才幹越<sup>レ</sup>余タリシ上、右ノ志深ニ依テ奉公ニ精ヲ出シケル候、無程雅楽頭殿御意ニモ入テ、傍近ク被召仕上ニ、御寵愛也。然トモ、常ニ物思氣色ニテ勇笑コトナカリシ間、雅楽頭殿モ不審ニ思召テ、或時主税ニ御尋有ケルハ、「其方常ニ襟<sup>モ</sup>氣色也。如何成故哉覽、又ハ如何様ノ望モ有ケルカ、不<sup>レ</sup>包可<sup>レ</sup>申」由被<sup>レ</sup>仰ケレバ、其時主税申上ケルハ、「私儀元來蜷川山城守普代ノ者ニテ侍ル。山城守浪窄ノ身トシテ紀州高野山ニ幽ナル体ニテ罷有侍ル。殿様ニハ誰有ヘキ。當時御一仁ニテ侍ル間、何トソ以折被<sup>レ</sup>達<sup>ニ</sup>上聞(二)山城守儀被召出候様ニ、乍恐頼上度奉存、御当家ニ御奉公ニハ罷出侍ル。此趣ヨリ外ノ望露程モ無之」由、神仏ニ誓テ申上ケレハ、雅楽頭

殿一々ト聞給テ、「其方ハ扱々志深キ者哉ト感信仕給ヒケル。何トソ以折可達 上聞問、頼母敷存ヘキ」由宣ヒケル。故ニ、雅楽頭引請テ御才覚有ケル故、無程御前ヘ相調、山城守殿被召出ヌ。大坂御陳ノ節ハ、上総介殿エ被爲附、出陣仕給ヒケルト云リ。扱其後、雅楽頭殿ヨリ彼主税ヲ山城守殿ヘ可有御戻由被仰ケレトモ、山城守殿其俣被召仕被下侍レト有儀也。其後、主税ハ次第ニ立身仕テ、雅楽頭殿家老ニ被仰付ケル。其以後 公方様御上洛ノ御留守ニ西ノ丸ヲ酒井雅楽頭殿ニ御預有シニ、火事出来仕テ悉焼失ヌ。還御以後主税書置仕テ切腹ス。其文言ニ曰、「今度御上洛ニ付西ノ御丸雅楽頭ニ御預被成所ニ、火ノ用心以下ヲハ雅楽頭私ニ申付侍ル。然ル所ニ随分火ノ用心申付侍レトモ、天運尽出火仕候既、偏私ノ不運ト申者也。雅楽頭力過失一円ニ無御座候。然トモ、私ノ過申分可仕様ナシ。故ニ切腹仕ル所也。此段御披露奉頼侍ル」ト有テ、御老中様ヘノ当ル所也。此故ニ雅楽頭ニハ何ノ御答モナシト云々々。

誠ニ此主税ハ世ニ珍敷男ト可謂者歟。其故ハ、主一人ノ御用ニ立者サヘ稀也。然ルニ、此主税ハ山城守殿、雅楽頭殿御而殿ノ御用ニ立テ死スルコト、数千歳ヲ経ルトモ稀ニソ侍ランスレ。又、其身ノ冥加ト可云者歟。嘸ヤ其子孫于今酒井家ノ家老ト成テ在ナガラ面目有儀、如此忠貞ヲ聞テモ不爲感信者共ハ、一向ニ武ノ家ヲ去テ、農工商ニ可成者也。此旨思量仕給ヘ。

①忌↓忠(大・金)。②レ↓シ(大・金)。③既↓段(大・金)。

一 寛永ノ比、江戸御旗本衆ニ野村勘右衛門殿ト云シ人在。此人ハ真鑓ノ上手ニテ有シト也。或時、所用ノ義有テ京都ヘ登リ給ヒシ節、南都ニ趣、法藏院所ニテ鎌鑓ヲ稽古仕ケル所ニ、木綿着物ニ小脇指計ニテ忍テ御座テ炬路口ノ辺ニイ給テ、朝ヨリ昼時分迄居給ヒケレバ、稽古ノ人々是ヲ怪ミ、「何者ゾ」ト問ニ、勘右衛門殿宣ヒケルハ、「是ハ辺土ノ者ニテ侍ルガ、承及タル鑓ノ御稽古ト見ヘタ

『功名咄』三(中巻ノ上)

リ。何トゾ不苦侍<sup>①</sup>見物仕度侍リテ、覚罷在侍ル」ト宣ヒケレハ、法藏院是ヲ聞テ、「夫程ニ所望ナレハ、入テ見物サセヨ」ト。依之稽古場ノ端ニ入テ見物サセケルニ、兎角ノコトヲ不云昼ヨリ夕食過比迄見物仕ケル間、法藏院云様、「扱々其方ハ鑓力数奇ト見ヘタリ。定テ少ハ不成コトハ有間敷。仕テ見ヨカシ」ト云。勘右宣ヒケルハ、「不調法ニ侍ル。御免アレ」ト辞退仕給ヒケレトモ、稽古ノ面々、「是非々々」ト責ケル間、「左有ハ仕可<sup>②</sup>見侍<sup>③</sup>」ト云テ立給ヒシニ、弟子共ヲ初法藏院ニモ、何ノ造作モナク勝給ヒケレバ、人々奇異ノ思ヲ成、其名ヲ問ニ、「名モナキ辺土ノ者ニテ侍ル。日モ早暮ヌヘウ侍レバ御暇」ト云テ立出給ヌ。法藏院モ不思議ニ思テ跡ヨリ人ヲ附テ見セケレバ、勘右衛門殿五・六町行給ケレハ、引馬・駕持・鑓狭箱ニテ、二・三拾人夥敷体ニテ待受テ、則駕ニ乗テ帰給フ。其後、能尋問テコソ野村勘右衛門殿トハ知ヌトカヤ。法藏院モ是ヲ無念ノコトニ思ヒケレトモ、可<sup>④</sup>為様ナクシテ年月ヲ送りケルト云リ。扱、此勘右衛門殿故有テ流人ト成、黒田筑前守殿ヘ被成御預、筑前福岡ニ居住仕給フ。然ルニ、法藏院ハ猶モ以前仕合ニ負タルコトヲ無念ニ思ヒ、「何トソ得時節勘右衛門ト參会仕テ、無念ヲ散ンコト思量仕、黒田殿為見舞」ト云テ筑紫ニ下向ス。筑前守殿ハ法藏院ハル々是迄ノ見舞悦着不斜馳走仕給ヒ、野村勘右衛門殿ヲモ被呼出、法藏院ト引合給テ四方山ノ物語数刻有テ後、筑前守殿宣ヒケルハ、「法藏院遙々ノ下向ニ常々練磨ノ鑓ヲ見物仕度侍ル。是非々々所望ニ侍ル。遣テ見セ給ヘ。誰カ相手ニ為立可申」ト宣ヒケルガ、「イヤ幸是ニ勘右ノ居給フ俣頼可申。覺有時節ナラテハ、名人同志ノ鑓ヲ難見」ト所望也。勘右衛門殿ハ「久敷手馴ス。御免アレ」ト辞退也。然トモ「是非々々」ト所望有シニ依テ、左有ハトテ立給ヒヌ。法藏院ハ鑓鑓、勘右衛門殿ハ直鑓ニテ有シニ、法藏院鑓ヲ取テ立ト等々混々ト入込所ヲ、勘右衛門殿直鑓ヲ拾テ飛入、腰ニ指タル扇子ヲ以テ法藏院カ首ヲ打給ヒシガ<sup>⑤</sup>ハ、筑前守殿是ヲ見テ宣ヒケルハ、「扱々面白キコ

ト哉」ト感給ヒ、「扱仕合ヲ謂ハ入身ハ法藏院ノ勝」ト云ベシ。又「勝負ハ勘右ノ勝ト可謂カ」ト宣ヒシト云々。

去ハ、野村流ニハ此勝ヲ手誥ノ勝負ト伝受仕テ、秘藏セラレケルト云ヘリ。去ハ、法藏院モ流石得<sub>レ</sub>名タル名人ナレハ、公礼ケ敷所テ無<sub>レ</sub>阿倍<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>負コト、無<sub>レ</sub>情コト也ト思給ヒテ、覚ヤ仕給ヒケシ。又ハ、法藏院モ上手ナレハ、不<sub>レ</sub>心成<sub>レ</sub>手誥勝負ニ成ケルカ。此段無<sub>レ</sub>覚束<sub>レ</sub>。然トモ、此段ハ態ト覚仕給ヒケルト被思待ル。其故ハ、我ハ窄人ナレハ負テ非恥辱。勝テ非譽。彼ハ鑓ノ家ナレハ、負テハ恥辱也。左有バトテ無<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>負ナンモ本意ナシ。我ハ仕損シテモ不苦ト思故也。又是非突ナント思コト、所ヲ突外タランニハ、手誥ノ勝負モ出合間敷者也。此所ヲ能々思量仕給へ。

①侍の右下に「ハ」と送り仮名(金)。②ガ↓カ(金)。

一 野村勘右衛門殿ハ、筑州福岡ニテ終ニ病死仕給ト云リ。其以後ハ、勘右衛門殿久ク被<sub>レ</sub>召仕<sub>レ</sub>ケル草履取、打太刀仕テ鑓ヲ能伝受シテ、黒田殿家中ノ面々ハ此者ニ稽古仕ケルトカヤ。然ル所ニ、其姓名ハ不知、黒田殿家老職ノ者武州江戸ニ下向シ、在江戸中ニ、或窄人者ニ鉤鑓ヲ稽古仕テ免ヲ執テ、「吾ハ一分上手也ト思テ持鑓ニモ鉤ヲ結構ニ拵、筑州ニ帰ル」ト也。然ルニ、此者モ最前彼草履取ノ弟子タルニ依テ、「永々ノ御在江戸無恙御仕舞目出度侍ル」ト云テ見舞タリケレバ、出会テ自慢タラタニテ鉤鑓ノ徳ヲ云ケレトモ、彼者一円ニ不<sub>レ</sub>受。其時、家老云ヤウ、「其方ハ我ラ云コトヲ実シカウ<sup>①</sup>ス思ト見ヘタリ。夫程ニ思フナラバ、仕合ヲ仕テ見ヨカシ」ト云。其時彼者云ヤウ、「其コトニテ侍ル。如何ニ被仰候トモ、物ノ一年ヤ半年ニ、左様ニ上手ニ為成給フコト不審也。定テ窄人者、物ヲ可執為誑タル者ト見ヘタリ。其上鉤鑓ハ殊ニ一大事ノ物ニテ侍ル」ト云バ、彼家老若キ人ニテ有ケル俣立腹シテ、「扱ハ我ラガ云コトヲ虚言ト存ルカ。左有ハ真劍ニテ其方ト仕合ヲ可<sub>レ</sub>為」ト云。彼者云ヤウ、「我ハ年老ナレバ被突殺侍リテモ不苦。如何ニモ仕合

ヲ被<sub>レ</sub>遊侍レ」ト云。家老、「左有バ其玄関ニ有鉤鑓ヲ執テ来ヨ」ト云バ、大身ニ鉤ヲ付結講ニ拵タルヲ持テ来ル。彼者ニ「何ヲカ持」ト云ハ「常々老人ナレバ極ハ重シ」ト云テ、竹ニテ直鑓ヲ拵ケケルカ、其竹刀ヲ取寄「是ニテ可<sub>レ</sub>仕」ト云。家老ハ弥立腹シテ「今見ヨ。突殺可<sub>レ</sub>侍」トテ立ヌ。然ル所ニ、何ノ造作モナク竹鑓ヲ以テ家老ノ胸板ヲ突タリ。家老カ云ヤウ、「今ハ仕損シタリ。今一度」ト云バ「如何程成トモ」ト云テ、又立相ケルニ、又同所ヲ突タリ。其時家老我ヲ折テ「扱々面目ヲ失ヒタル物哉。窄人物執ニ云コトヲ実ト思ヒ誑サレ侍ル。御免有」ト降参シテ、結構ニ拵タル大身鉤鑓ヲ踏石ニ当テ寸々ニ打折テ捨テ、又野村流ヲ信仰セシト云。誠ニ、此家老若キ人ニハ左モ可有。乍去、真劍仕合ハ余ニ事過テ短慮ニ侍ル。如何モ竹刀ヲ以テ怪我ナキ様ニ仕合ヲシテ可試コト也。去ハ、一流ヲ極タルト云ニモ可有浅深カ。其故ハ、教ル人ノ智恵ト習得人ノ智恵トニ依テ、段々品々有ヘシ。其所ヲ能々分別シ給へ。然ハ、第一ニ可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>練磨物ハ有智。智恵有時ハ、我分量ヲ知コト勿論也。去ハコソ、智ハ方<sup>②</sup>代ノ宝トハ云ヘリ。此所ヲ思量仕御坐在。

①ウ↓ラ(大・金)。②方↓万(大・金)。

一 寛永正保ノ比、眞田伊豆守殿御子息兩人在シニ、惣領ヘハ上野沼田ノ城ヲ為讓給ヒ、知行七万石ノ領主也。次男伊賀守殿エハ信州川中嶋ヲ讓給ヒ、知行五万石ヲ領主也。然ルニ、御親父伊豆守殿ヨリ伊賀守殿ニ金子五万両為讓給ヒケルニ、惣領家ニ押留一円ニ不渡。依之伊賀守殿ヨリ種々宣ヒケレトモ不渡。故ニ、後ニハ公儀ノ沙汰ニ及ケルニ、其比伊賀守殿家老ニ旧ハ甲州侍、大熊備前カ孫、大熊靱負ト云者、同家ノ用人ニ金村弥平左衛門ト云者、此ノ兩人ヲ江戸老中ノ御前ニ被召出、其様子ヲ御尋有ケルニ、御老中ノ返答ヲハ靱負ニ為到、弥平左衛門ハ一向聲ノ真似ヲシテ其道理計悉ク云達シケレハ、江戸老中モ被御聞分伊賀守殿ヘ金子被相

渡侍ト也。依之伊賀守殿ノ利運ニ成ヌト云々。

誠ニ、弥平左衛門カ智勇、乎<sup>①</sup>舌ニ依テ利運ニ成ケルコト、時ニ執テノ高名ト云ヘシ。其故ハ、御老中ヲ敬テ返答ヲ仕テ吾道理ヲ不云。此方ノ道理難達。又<sup>②</sup>、不敬ノ吾道理計云時ハ、不敬ノ咎有ヘシ。兎角ニ聾ナレハ、吾一円ヲ云ヨリ外ナシト分別シテ聾ニ成ケル者歟。此所ハ智也。然トモ、無<sup>レ</sup>勇、是モ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>成。去ハ、武士ハ万事ニ付テ勇ヲ第一トス。又、吾道理ヲ微細ニ云分タルハ弁舌也。此所ヲ思量仕給ヘ。然トモ、弁舌ハ猶末ヲ謂也。本智<sup>③</sup>発クニ有ハ、弁舌ハ自可出者歟。此所ヲ能々了得仕給ヘ。

①乎↓弁(大・金)。②ヌ↓又(大・金)。

一 関ヶ原合戦刻、其時ノ主人ハ不覺、辻肥前ト云者、関東勢ノ内ニテ河渡ノ涉ニテ先陣仕テ河渡川ノ中ノ洲ニ至テ、腰ヨリ扇子ヲ拔出シテ味方ヲ指招テ、味方後ヨリ続テ渡ケレバ、又先ノ河ヲ渡テ向ノ岸ニ上リ、敵ヲ討テ首ヲ執ケルト云リ。是ヲ世人河越ノ先陣ト云。殊更河ノ中ノ洲ニ至テ、味方ヲ招テ衆ヲ進タルコト、賞美セシト云々。

誠ニ、此肥前河越ノ先陣サヘ軍ニ勝タリ。増テ矧扇子ヲ拔テ河ハ渡ルニ安シ。越給ヘト招テ進タル所、誠死生ヲ離テ智勇有故也。去ハ、此肥前数度覺ノ者也ト云トモ、是ヲ第一ノ手柄ト思、世人モ是ヲ賞美セシト云リ。可<sup>レ</sup>羨コト也。去ハ、セワシキ所ニテ心優ナルハ、武士ノ常々ノ心懸ニ依ヘシ。是ヲ仏法ニハ道ト云。如此コトヲハ、折節ハ坐禪ヲモ仕又ハ禪家ヘモ立寄、聞覚給ヘカシ。伝聞関東江戸ノ城主、太田道灌ト云人ヲ、鎗突テ日比ノ道者ナラハ歌誦ト云ハ、「カ、ル時左コソ命ノ惜カラメ兼テ無身ト思ヒ知ズハ」ト誦給ケルトカヤ。又、蜷川新左衛門ト云人ハ、太刀ニテ切合ケル時、「打太刀ノ金ノ響ニ夢覺テ衣脱ノカラニ鶏鳥ノ聲」ト詠セシトカヤ。是モ聞ル道者也。武ヲ嗜<sup>レ</sup>ン者ハ物毎ニ莫<sup>レ</sup>捨莫<sup>レ</sup>着<sup>ス</sup>ルコト。

一 大坂御陣ノ時、其所ノ主人ヲモ不<sup>レ</sup>知、天野半之助ト云者、其合戦ノ場ハ巖道ニテ有シニ、味方敵ニ被<sup>レ</sup>追立<sup>レ</sup>シニ、半之助モ不<sup>レ</sup>心成<sup>レ</sup>被押立テ退ニ、道ノ脇ノ田ノ畔ニ除テ、鎗ニテ地ヲ扣テ、「比興也。返セ々」ト云ケレトモ、不返シテ引ケル故、半之助モ「殿メ引退ケル」ト云リ。世人是ヲ褒ケルト也。其後、世靜テ、浅野但馬守殿エ被召出テ在シニ、老後ニ子共鎗ヲ稽古セシニ云ケルハ、「吾ハ若キ時分ヨリ終ニ鎗ヲ不習。然トモ終ニ仕損ジタルコトナシ。其仕様ハ我鎗ヲ以テ掛ルニ、敵ノ鎗ノ穂先我甲ノ天辺ニカラリタト当ル比ヲヒヨリ、足ヲ踏込テ敵ノ真中ヲ突ニ、終ニ敵ヲ突外タルコトナシ」ト語シト云々。

誠ニ、此半之助勇氣正ク、義有兵ト見ヘタリ。其故ハ、味方敗軍シテ不<sup>レ</sup>心成<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>押立<sup>レ</sup>ト云トモ、道ノ脇ノ田ノ畔ニ除テ「返セ々」ト云ケルコト、衆ヲ進ムルノ言葉也。去ハ、一言也トモ覺有詞ヲ云コト、軍中ニ於テ第一ノ功ト云ヘリ。開敷<sup>④</sup>所ニテハ心騒安クシテ難<sup>レ</sup>云物也ト云リ。左有ハ、半之助ニ勇義無シハ如何シテ云ンヤ。勇有テ無義、酒狂人ニ等シ。去ハ、我ハ左様ナル乱世ニ不<sup>レ</sup>逢<sup>レ</sup>生シテ不<sup>レ</sup>知トモ、火事・洪水ノ時分ナトモ心ハ騒安クシテ、能分別能一言ハ、平生程難<sup>レ</sup>出者也。爰ヲ以テ思コト<sup>①</sup>時ハ、半之助ヲ世人賞美セシコト最也。又、鎗コト<sup>②</sup>勿論善仕様也。然トモ、覺有コトハ理ト氣ト所作ト心ト、一致連続シテ行道理ニ有スンバ、本理ニ非ス。昔物語ヲ聞テ、其事善理也トテ其俚用ルヲ法氣トハ云ト也。此旨思量仕給ヘ。

①コト↓フ(大・金)。②コト↓ノコト(大・金)。

